

2025 年度 文化遺産学専攻夏期研修旅行 報告書

2026 年 2 月

龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻

例 言

1. 本書は、龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻が2025年度に実施した、夏期研修旅行の報告書である。
2. 夏期研修旅行は、文化遺産学演習Ⅰ（ゼミ）の受講生が参加し、各ゼミ単位で実施した。
3. ゼミの担当教員は、以下のとおりである。
國下多美樹（文化遺産学専攻教授）・北野信彦（同）・神田雅章（同）・木許 守（同）
4. 研修旅行の実施に際して、以下の機関・各位のほか、多くの方々のご支援を賜りました。記して感謝の意を表します（順不同）。
土岐幸司氏・秦野親史氏・紀伊知実氏（以上、新居浜市別子銅山文化遺産課）
中井正幸氏（岐阜聖徳学園大学）
5. 本書の編集は、木許の指導のもと、各ゼミから選出された委員により組織した編集委員会が行った。編集委員は、以下のとおりである。
村上 征太郎（木許ゼミ）・宮崎さくら（神田ゼミ）・道畑湧喜・長江諒太（以上、北野ゼミ）
・平野葵依（國下ゼミ）

目 次

I	ゼミ合宿金沢	（北野ゼミ）	1
II	新木濱の文化遺産—近代化遺産とその活用を考える—	（木許ゼミ）	12
III	美濃とその周辺の遺跡と関連施設の考古学的踏査	（國下ゼミ）	20
IV	美濃・尾張の文化遺産をめぐる	（神田ゼミ）	31

I ゼミ合宿金沢

2025. 9. 2～9. 3

学ぶべきことと、学べたこと

担当教員：北野 信彦

文化財科学ゼミでは、ゼミ生が個人として興味を持つ建築史や美術史、伝統技術の諸分野におけるさまざまな有形・無形の文化遺産の調査・保存修復・活用に関する卒業研究として、主に保存修復科学的(文化財科学・保存科学・修復技術)な手法を用いて取り組む方法が身に付けられるような教育を心がけている。今年度の北野ゼミの旅行は、9月2日(火)～9月3日(水)の1泊2日の日程で14名のゼミ生とともに合計15名で金沢市内及び周辺地域の文化遺産関連施設を訪れた。今年のテーマは「金沢の伝統技術の文化財保存修復科学の現場を巡る」である。

旅行日程は以下の通りである。まず初日の9月2日(火)は、京都駅もしくは新大阪駅に集合して全員でJR特急サンダーバードから北陸新幹線を乗り継いで金沢駅へ移動した。昼食後、徒歩にて金沢城の近くに所在する石川県立美術館附属施設である石川県文化財保存修復工房において絵画修復の現場作業を見学した。この修復工房では、実際の絵画修理が行われており、装こう(日本画修理)技術である和紙・古糊などの絵画修復材料と各種道具、実際の作業風景をまじかで詳しく解説いただくことができた(写真)。この工房では、実際の絵画修理が行われており、このエリアは2020年に東京から国立工芸館が移転するなど、多くの博物館施設がある文化エリアである。その後、徒歩にて石川県立歴史博物館において、野々村仁清作の国宝雉香炉や古丸谷コレクションなど加賀ゆかりの美術工芸品の数々を見学した。さらに江戸時代後期の加賀前田家ゆかりの御殿である成巽閣の見学を行った。当時の工芸

技術の粋を集めた御殿建造物ゼミ生たちもかなりのインパクトを与えたようである。成巽閣から、日本三大名園の一つである兼六園もめぐり、徒歩にて宿泊先のホテルに戻り、意見交換会を兼ねた夕食では金沢の伝統食である加賀料理を食べながら、ゼミ生同士の親睦と今後の文化財科学分野への研究の意識を共有することができたと考えている。

2日目は、徒歩にて金沢市が設立したモノづくり大学校において、文化財建造物の保存修復や町並み保存に関する様々な教育プログラムの取り組みのレクチャーを受け、さらには左官・屋根葺き・石組・装こうなどの各工房を見学した。その後、バスにて、金沢の伝統的建造物群と文化的景観が残るひがし茶屋街の一角にある金沢市立安江金箔工藝館(金箔技術振興研究所)で川上明孝館長から2021年にユネスコの無形文化遺産に登録された「伝統建築工匠の技」17団体の1つである伝統縁付箔の歴史と技術に関する講義を受けた。伝統縁付箔は日光東照宮の修理にも使われるなど、文化財修復に欠かせない材料である。引き続き、展示施設を見学しながら伝統金箔製作の解説を頂いた。午後は、自由見学として、ゼミ生個人が興味ある金沢市内の文教施設を見学して夕方の北陸新幹線から特急サンダーバードで帰路に就いた。金沢は、全国でも珍しく第二次世界大戦で空襲が無かったため古い建築や伝統工芸がよく残る町である。京都と対比される文化都市の金沢であるが、実際の町並みと文化財修理に関する現場をじっくり見学できた。なお、研修旅行自体はこの2日間の行程であったが、金沢周辺には文化遺産に関係する施設も多い。なお、個人個人のゼミ諸君らの学んだ内容は、それぞれのレポートにまとめてもら



石川県保存修復工房 日本絵画修復現場作業 見学風景



石川県保存修復工房前での集合写真

っているが、それぞれ充実した研修旅行となったようである。

ゼミ旅行：道畑湧喜

9月2日、3日に文化財科学ゼミのゼミ合宿が実施された。そこで学んだことをまとめる。

金沢に到着して昼食を済ませたあと、石川県立文化財保存修復工房を訪れた。ガイダンス室で映像を見て補足説明を受けてから表具修復室を見学した。そこで実際に作業しているところを見て、実際に使われている道具などを手に取って説明してくれた。実際に触れて感触や匂いなどを感じることが出来た。畳の上で作業していて、テーブルなどを使う方が正座しなくていいし作業しやすいのではないかと思った。

石川県立文化財保存修復工房を出て次に石川県立美術館に向かった。そこには国宝の色絵雌雄香炉と色絵雄香炉があった。正面から見ると面白いと説明に合ったので見てみたが、挑発されているような感じがしてあまり好きではなかった。

次は成巽閣に向かった。成巽閣にはウルトラマリンブルーが使われている群青の間、書見の間などを見学した。群青の間、書見の間は天井に主に使われていたウルトラマリンブルーが異様な雰囲気を出していた。和風の部屋に今まで見た事のない青の存在感が凄かった。1階にある浅葱縮緬地御所解文様繡小袖やお庭がとても綺麗だった。現代では畳の上を歩く機会があまりないが、成巽閣は畳の匂いや外の風の匂いなど雰囲気がとても良かった。成巽閣を出ると隣の兼六園を見学した。自由に見てまわられた。霧ヶ池の上に茶屋があった。まだ見て回らないと行けなかったので茶屋に入ることが出来なかったので今度いく時は訪れようと思った。

晩は北野先生の行きつけのお店で食事をした。地酒を飲むこともその土地を学ぶことだと感じた。とても美味しかった。また訪れたいと心から思った。



石川県立美術館の色絵雌雄香炉

2日目 ホテルを出てから金沢職人大学校を訪れた。金沢職人大学校では、[1]文化財建造物保護に対する基本的な考え方に従い、石川県内および金沢市内で修復の必要が認められる歴史的建造物（登録文化財および県市町村指定文化財建造物を含む）に対し、専門知識を備えた技能者として寄与する人材の養成。[2]金沢職人大学校の講師として、今後における後継者指導および職人の技研究などに寄与する人材の養成。を研修の目標としている。説明を受けてから実際に構内を見学した。見学した中でも印象に残っているのが大工科と造園科、畳科である。畳を作るのに初めにイ草をととても薄く編み込んでいて祖母の家にある畳もあのような工程を踏まれて作っていると知れてとても勉強になった。それとい草の匂いがとても良かった。

造園科では金沢の冬を耐え抜くための知識を教えてもらいとても良かった。土壁を守るために薦掛けをしていると知った。大工科で釘を使わない梁の作り方などを教えてもらい実際に見て互いが互いを支えるような構造だった。

金沢職人大学校を出ると次は金沢市立安江金箔工芸館を訪れた。到着して初めに金箔の作り方を分かりやすくまとめた動画を視聴した。金箔に使われた紙はあぶらとり紙に成ると学んだ。お土産売り場にあぶらとり紙が売られていた理由がわかった。その後に展示されている作品を見て自分の気に入った物をメモしたりして楽しかった。その後自由時間にひがし茶屋街で海鮮丼と金箔ソフトクリームを食べた。

今回のゼミ合宿で金沢の文化財について深く知ることが出来た。ゼミ仲間とも仲良くなれて研究内容なども相談しあってこれから高め合っていきたいと思う。

文化財化学ゼミ合宿レポート

：三浦航太郎

保存科学ゼミのゼミ合宿は9月2日、3日に金沢にて行われた。サンダーバードと新幹線を乗り継いで金



成巽閣

沢に行き、石川県立美術館文化財保存修復工房を訪れた。そこで行われていたのは、昨年1月に発生した能登半島地震にて被災した文化財の修復だった。文化財修復において大切なことは多岐にわたる。技術面(再現度)もちろんだが、そのなかにはスピードも含まれる。2011年の東日本大震災で与えられた傷が癒えない中、能登半島地震の被害を受けた文化財を修復していく。災害を前にして人々ができることは少ない。自分自身の命を第一にすることはもちろんだが、その結果生き残った者の責務の一つとして、引き継がれてきたものを後世に残すことがあると改めて感じた。

その後、金沢城内部に位置する成巽閣の見学に赴いた。成巽閣は加賀藩13代藩主・前田斉泰が母である真龍院の隠居所として作った建築物である。この建築物の醍醐味は様々あるが、中でも群を抜いているのが群青の間だろう。群青の間は数寄屋風書院造であり、続く書院の間と共通して、折上天井の他、蛇腹および目地にはウルトラマリンブルーが使用されている。西欧から輸入されたこのウルトラマリンブルーこそが群青の間と呼ばれる要因である。

その後、兼六園を巡り、一泊したのち2日目、金沢職人大学校を訪問した。金沢職人大学校が創立された経緯は、職人技の必要性の減少に伴って、金沢独自のまちづくりを支える職人の数も減少する可能性を危惧した当時の市長の考えによるものだという。その目的は職人技の伝承と後継者の育成、匠の技の社会的評価の向上が挙げられる。この目的を軸に1996(平成8)年に創立され、新しいコースが設置されながら、現在に至っている。

午後からの自由行動では、私は泉鏡花記念館を訪れた。泉鏡花の生家を記念館にしたもので、醍醐味は泉鏡花の直筆原稿が多く残されていることである。しかしそれ以上に価値があると考えたのが、企画展「芥川さんのこと」である。芥川とは言うまでもなく芥川龍之介のことである。彼と泉鏡花の関係は深く、鏡花全

集の編集委員を務めていたほどで、芥川が小説家を志したのも泉鏡花がいたからだという。彼らは熱心に文通をしており、それが今なお鏡花記念館には飾られていた。近代文学が好きなのにとっては非常に興味深い内容だった。

今回のゼミ合宿では、震災時の保存・修復について、そしてそれらの技術の伝承の中心地を訪れた。私は保存科学という分野を学ぼうと決めているが、今回実感したのは、「科学」という側面に囚われすぎているのかもしれないということだ。確かに興味を持っているのは保存科学である。そこは間違いないが、それよりも先人たちが紡いできた文化財の伝承を第一に考えないと、保存科学がある意味はないのだと感じた。大学生生活の序盤で学ぶはずであることがすっかり抜け落ちていたことにいまさらながら気づかされたゼミ合宿だった。今後は「引き継がれていくモノを、さらに次代に引き継ぐ」ことを念頭に置きながら勉学に励みたい。

金沢ゼミ旅行レポート：大東 ゆり

今回のゼミ旅行では石川県金沢市にて金沢の文化遺産や伝統文化について見学して学んだ。

1日目は金沢場周辺と修復工房、石川県立美術館を訪れた。修復工房では絵画や地図の修復作業を見学することができ、実際の作業を見てどのように絵画が修復されているのかを確認することができた。膠の実物を見ることができた事が一番印象に残っていて、修復に使われているのりにはいくつかの種類があり、10年ほどかけてのりを寝かして作るものと即席で材料を混ぜることで出来るものがあった。それらすべて修復工房内で作られており、他所から仕入れているのは材料だけであることに驚いた。また、絵画のみならず昨年の地震の影響で損壊してしまった神社のふすまや、扉の修復も行われていた。修復工房では、修復現場の現状と実際の作業を見ることによってどのようにして普段修復が行われているのかを学ぶことができた。

次に県立美術館では、現代美術と古代美術両方を比べて見学することができ、古代美術展示室では和歌が描かれた日本画が印象に残っている。丁度その時、源氏物語絵巻のコレクション展示が行われていて、絵巻の実物を閲覧できとても感銘を受けた。その他に九谷焼や金箔を使用した絵画なども展示されていた。現代美術展示室でもやはり金箔が使用された作品が多く、絵具に金箔を混ぜる技法が最も多く使用されていることが分かった。

そして、この旅行において最も印象に残っているのは兼六園の成巽閣である。成巽閣とは、文久3年に加賀藩13代藩主・前田斉泰が母・真龍院の隠居所として建てた歴史的建造物で、1階は書院造で2階は数寄屋



金沢城 石川門の石垣

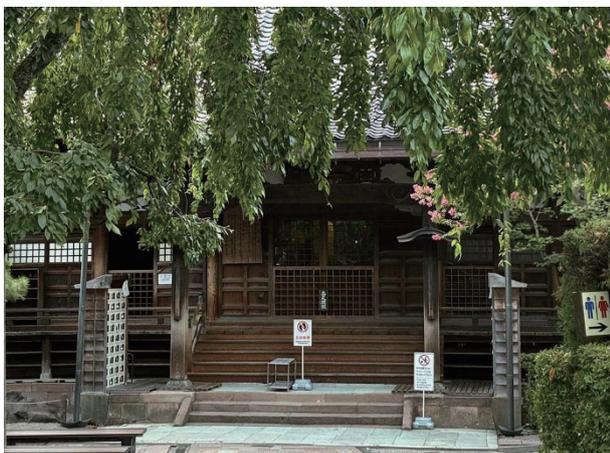
造になっている大名屋敷の代表的な建築物だ。中でも特に目を惹かれたのは群青の間とそれに続く書見の間である。群青の間はその名の通り天井が鮮やかなウルトラマリンブルーという西欧より輸入された顔料が塗られていて、当時の色彩で考えるとなかなか派手な色合いで驚いた。壁は紫色で反対側の襖は赤色で塗られており、この空間だけでも色鮮やかで壁一つ一つの模様や使用されている材料が違いとても洒落ていた。しかし、所々地震の影響がみられる部分もあり、まだまだ修復の手が届いていないところもあるのだと実感した。

最終日には自分自身が最も訪れたいと思っていた金沢城に行くことが出来た。金沢城は石川門から城壁、五十間長屋においてそれぞれ石垣の形が違う。東の丸北面にある石垣は、金沢城では数少ない初期の姿を伝える自然石積みで石を加工せず、そのままの形でバランスや大きさを考えて積む用法であった。二の丸北面の石垣には粗加工石積みと呼ばれる石垣の用法が使用されていて、石川門の石垣には切石積みと粗加工石積みの両方が使われていた。二つの種類の石垣を同時に観察できるのはやはり金沢城ぐらいで、様々な用法が用いられていることに面白さを感じる事が出来た。

夏季研修旅行報告書：山野邊 千晴

私の所属する文化財科学ゼミでは夏季研修として、9月2日から3日にかけて石川県金沢市を訪れた。1日目は石川県文化財保存修復工房、石川県立美術館、成巽閣、兼六園を見学し、2日目は金沢職人大学校、金沢市立安江金箔工芸館、自主研修として金沢城、妙立寺などを訪ねた。特に印象に残ったのが金沢の建築物である。

1日目で見学した成巽閣は江戸末期、文久3年(1863)に前田家13代齋泰が母親である眞龍院の御殿として造営した2階建ての奥方御殿で、1階は書院造、2階は数寄屋風書院造となっていた。1階の謁見の間の装



妙立寺

飾は想像よりもすっきりしていたが細部を見ると釘隠しや色鮮やかな欄間、襖などから豪華さが伝わってきた。また、2階の群青の間はその名の通り天井が群青色、壁は辰砂と群青の混ざった紫で色遣いの豪華な部屋であり、事前に調べていても実際に見なければ伝わらないような空間に圧倒された。建物自体のデザイン性もさることながら、部屋以外にも建物内の様々な部分に小さな装飾や意匠が散りばめられており前田家の財力や美術へのこだわりを感じられる御殿であった。

2日目の自主研修で印象的だったのは妙立寺である。こちらは寛永20年(1643)年に前田家2代藩主利常により金沢城の近くから移築、建立された日蓮宗寺院である。加賀藩と親密な関係の寺院で、藩主専用の隠し拝殿や多くの仕掛けやからくりを備えており階段数は29、部屋数は23室の4階建て7層造りとなっている。建立当時、城郭以外は3階建て以上にするのが幕府により認められていなかったことを考えると非常に珍しい建造物であるといえるだろう。このことにも驚いたが、領主用の寺内で最も格式の高い部屋、堂内の井戸から続く太鼓橋の反対側の部屋も群青壁であること、茶室の装飾にも群青が使われている旨の解説を受け、いつの時代から装飾や壁に群青が使われていたのかは不明だが群青壁を成巽閣以外でも見られると思っていたため大変驚いた。ほかにも物見台、至る所にある落とし穴や隠し階段、それらの複雑な建築を雪の重みから守るための太い梁など様々な工夫も非常に興味深かった。

金沢は第二次世界大戦での空襲被害がなかったため多くの戦前の建築物が焼失せずに残っている。そのため上記以外にも武家屋敷街や古い寺院建築、明治の建築などが多く残されていた。私は今回の研修でこのような場所に石川県文化財保存修復工房や金沢職人大学校のような保存や修復を行う機関があるということに大きな意義を感じた。職人大学校では条件を満たせば伝統的な建造物の修復を学ぶことが可能であるというお話を聞き、保存修復工房では実際の作業の様子を間近で見せていただいた中で、文化財のある所に十分な保存や修復のできる人がいて機関がある場所というのは非常に少ないが重要であるということを再認識できた。2日間で可能な限り博物施設や伝統的建造物を訪ね、文化財についての学びを精一杯深められた研修であったと感じている。

金沢合宿レポートまとめ：三村紗愛

北野ゼミ合宿では、石川県金沢市を舞台に文化財の保護保存の現場や、北陸地方特有の文化遺産を体験した。その中でも特に興味深かった石川県文化財保存修復工房についてまとめる。

当工房は、地方自治体としては唯一の文化財修復工房であり、その立地を生かし地域に根差した活動を行っている。2024年に発生した能登半島地震で被災した文化財の一部もここで修復された。津波の被害を受けた古文書は凍結乾燥が必要だが、その処理をできる場所が北陸地方に少なかったため、一部の被災文化財は奈良県などの関西地域で処理が行われた。彩色の施された掛け軸に関しては、凍結乾燥をすると絵具が剥がれてしまうため、広げて水分を吸着して取り除いた。能登半島地震は比較的乾燥した時期に起こったが、夏の水害などの場合は、さらにカビの被害があり、より時間との勝負になるという。そういった意味では、県内に工房をもつ石川県は文化財レスキューに強いのだと職員の方が語ってくれた。また、地域ごとによく扱う文化財の種類があるのだという。当工房では特に絵馬を扱うことが多い。普段から扱っている文化財のほうが理解度も高いので、いざレスキューする際に扱いやすいのではないかという話は新たな発見だった。地方自治体が文化財修復工房を持つことの意義は、こうしたレスキュー活動にもあるため、特に地方では各都道府県にこうした工房を設置する必要があるのではないか。能登半島地震のように津波をとまなう地震や、水害ではより迅速な対応が求められるため、より多くの工房の整備が急がれる。

また、日頃の仕事でもよく使われるというしょうふのりを、どこの工房でも独自に糊炊きして作っているという話も興味深かった。作り出したのりのやわらかさは、加える水の量を変えることで対象物によって調整している。紙類を扱う場合はポターージュのようなやわらかさにするなど、経験による感覚で調整しているそうだ。また、のりの保管にワインクーラーが適しているなど、実際に働く職員だからこそその知見を聞くことができた。

実際に勤務しているからこそわかる話を聞くことができ、非常に有意義な訪問だった。特に、被災文化財



石川県立文化財保存修復工房

を扱った時の話は興味深く、今後の研究について考えるきっかけとなった。

ゼミ合宿乾燥レポート：内麻祐人

今回の金沢ゼミ合宿では、1泊2日という日程で金沢における文化財修復とそれを支える工芸の技について学べる場所を数多く回った。安江金箔工芸館や金沢職人大学校など、どれもとても貴重な学びになるものばかりだったが、今回の旅行で心に最も残った見学先は石川県文化財保存修復工房である。

石川県文化財保存修復工房は石川県立美術館の裏手の少し奥まった場所に存在する修復工房で、旧陸軍の師団長庁舎を改装・増設した建物が特徴のお洒落な外観を持つ工房である。私たちはそこで様々な文化財の修復についてのお話を聞かせていただいた。基本的な道具の使い方や、使用する和紙の紹介。糊の炊き方とその使い方など、どれも非常にためになるお話ばかりであったが、私の心に強く残ったのは、作業室の奥の部屋に大量に並べられた障子の骨と、積み上げられたレスキューされた文化財を収めた箱であった。

工房の作業室はふすまで仕切られた2部屋構成になっており、手前側に見学用窓が付いている。手前の部屋では古い地図の補修が行われていて、これもまた興味深い作業だったが、外からは見えにくい奥側の部屋では、もうすぐ2年が経とうとする能登の震災のレスキュー作業が懸命に行われていた。大量の障子の骨は能登地震の被災地に位置する寺から運び出されたものだという。文字通り山積みのレスキューを待つ文化財を前にして、工房の職員さんたちがパーツの一個一個を丁寧に取り付けて修理している姿が非常に心に残るものだった。

そして、奥の部屋で聞かせていただけた話もまたとても興味深い物ばかりであった。人命優先のために文化財のレスキューが向かうには2か月ほど遅れることになった話。古文書類を凍結乾燥させる装置が石川になく、凍結のために奈良の文化財研究所まで運ばなければならなかった話。冬の発災だったためにカビの被害は比較的抑えられた話など、様々な現実の話を聞くことが出来た。震災から2年を経て、さらに本格化していく文化財レスキューの最前線の現場を見ることが出来たのは、とても貴重な経験だと強く感じた。

金沢の街は普段と変わらぬいつもの雰囲気こそしているものの、いまだに震災の跡ははっきり残っているのだという事も見学を通じて強く感じた。移動中に見かけた金沢城の崩れた石垣はまだまだ工事中であったし、工房を訪れた後に見学した成巽閣も、土壁のあちらこちらに亀裂がまだ残っていた。

相次ぐ災害を前にして、日本中の多くの文化財修理

の専門家が日夜懸命に活動していることをとても強く感じる事が出来る経験であった。しかしそれと同時に、文化財レスキューや修復の現場にはまだまだ人手が必要であろうという事も強く感じさせられた。もし今、仮に京都で、はたまた東京で大きな災害が起きて、文化財の世界に今までとは桁違いの被害が起きたとき、文化財レスキューは本格的にパンクしてしまうのではないかという懸念も感じた。非常に爽りのあるゼミ合宿であったと感じた。

金沢での夏季研修旅行を通して：谷内奎吾

文化財科学ゼミの夏季研修旅行として石川県金沢市を訪れ、2日間にわたり金沢の文化財に触れ、その保存・修復について学んだ。その中でも特に印象に残ったのは、石川県文化財保存修復工房と金沢市立安江金箔工芸館である。本稿では、この二つの見学から得られた学びや気づきを中心に述べようと思う。

まず、石川県文化財保存修復工房では、装飾文化財の修復作業を間近で見学した。普段はなかなか触れることのできない修復時の道具や材料を、実際に見たり手に取ったりできたのは非常に貴重な経験であった。牛皮和膠と三千本膠や、生麩糊と古糊を実際に触れて比較し、その色や匂い、質感を確かめることができた。古糊のなんともいえない独特な匂いはとても印象に残っている。生麩糊は数日で腐ってしまうためワインクーラーで保存したり、水囊を用いて粘りを調整したりしている。一方、古糊は粘り気が弱く、刷毛で叩き込むように塗布するなど独特の使い方がある。このように同じ「糊」でも性質が異なっており、それに応じて使い分けがなされていることはとても興味深いと思った。

また、修復に用いる刷毛も多様で、毛の種類によって硬さやその用途が異なる。タヌキやブタの毛を使った刷毛を実際に触り比べ、その違いも体感することができた。さらに、修復に欠かせない和紙にも用途ごとに厚みや質感の異なる多様な種類があり、場合によっては白さを出すために薬品を使うこともあると教わった。

工房内の環境にも注目したところ、棚や机は木材できており、作業者は畳の上に座って作業をしていた。このような造りは、装飾文化財が温湿度の影響を受けやすい性質を考慮し、木材や畳を用いることで文化財への被害を最小限に抑えるための工夫だと考える。

2日目に訪れた金沢市立安江金箔工芸館では、金箔の製造工程や使用される道具、美術工芸品を通して、金箔の魅力と多様性を学んだ。特に印象的だったのは、金箔づくりにおいて「紙」の存在が極めて重要であるという点だ。澄打紙や箔打紙は仕込みに数か月を要し、

その出来不出来が金箔の品質を決定づける。現在ではカーボン紙が主流だが、長い年月をかけて築き上げられた紙の工夫が金箔の美しさを作り上げているのだと感じた。また、使い終えた箔打紙が舞妓のあぶらとり紙として再利用されていたことにはとても驚いた。

さらに、金箔は金・銀・銅の配合率によって色味が異なり、館内の体験コーナーからは、銀の割合が増すと光に透かしたとき青みが強く現れることも学べた。展示品からは、金箔を「金泥」、「截金」、「金糸」、「沈金」などの多様な装飾技法として使用されていることを知れた。金箔の様々な工夫によって華やかさや立体感、落ち着きをも表現できるところに魅力を感じた。

今回の研修旅行では、金沢で生まれた独自の文化や文化財に多く触れ、その魅力を発見できた上、普段ではあまり見ることのできない「保存修復」という観点からも学ぶことができた。そして何より、五感を通じて金沢の魅力を知れたことが自身にとって、とても忘れがたい思い出となった。金沢には京都と同じく歴史的な建物や伝統的な文化が残っているが、その一方で、どこか異なる街並みや独特の文化を感じさせ、また訪れたいと感じさせる街であった。

金沢ゼミ旅行レポート：上田麻那李

今回、私が参加したゼミ旅行の行先は金沢であった。9月2日から9月3日の2日間で、金沢職人大学校や金沢市立安江金箔工芸館などを見学した。修復の際に用いられる技術やそれを生かして制作されたモニュメント、金沢の伝統的な金箔の技術などを実際に見て、お話を聞き、金沢の文化や伝統技術に触れた2日間であった。

金沢職人大学校では、金沢という地に残る伝統芸能や伝統工芸の紹介と金沢職人大学校を設置した目的、金沢職人大学校の2つのコースと各科の紹介のお話を聞いた。そしてその後、各科の実習を行う工房を実際に見学して、どのようなことを行っているかの説明を



金沢市立安江金箔パラボラ天井

聞いた。お話を聞いて特に印象に残っていることは、金沢にはたくさんの伝統芸能や伝統工芸が今でも伝えられており、それらを守り、伝えるために当時の市長が尽力したという話だ。やはり伝統的な技術を伝えるためには自治体の力も大きいと思った。金沢職人大学校は1996年に9業種9組合の協力と金沢市の出資もあり設立された。研修コースは大きく分けて2つあり、本科と修復専攻科に分かれる。本科の研修期間は2年で、夜間または週末に研修が行われる。対象者は中堅の職人で、現代の工法をマスターして学ぶ意欲のある人にむけたものとなっている。本科で学ぶには各組合の推薦が必要となっている。本科には9つの科があり、大工科、石工科、瓦科、左官科、造園科、畳科、建具科、板金科、表具科となっている。これらのコースを修了した修了生は、金沢市が「金沢匠の技能士」に認定される。修復専攻科の研修期間は2年間で、建築の歴史などの座学や現地調査や実測・製図を学ぶ。金沢職人大学校の説明を聞いた後、実際に工房を見学して、研修に用いられる道具や作業の工程を見た。瓦科の作業の工程がとても印象に残っており、瓦を葺いた屋根を解体し、再び瓦を制作し葺きなおす工程を行うという説明を聞きとても緊張する作業だと思った。展示されていたモニュメントは各科の特徴と技術を一目で見ることができる。このモニュメントを制作するためにたくさんの技術が使われていることを今回の見学で知ることができた。

金沢市立安江金箔工芸館を見学した時に特に印象に残っていることは、伝統的な金箔を作る際に用いられる紙についてである。澄打紙と箔打紙に分かれている。澄打紙は稲わらの茎を主原料に楮(こうぞ)を加えた手漉和紙を原料にしており、仕込むのに1週間かかる。箔打紙は雁皮に特殊な土を加えた手漉和紙を原料に、仕込むのに2~4か月かかる。驚いたことは紙を仕込むのにこんなにも時間がかかることだ。紙の出来不出来が金箔づくりには大きな影響を与えると聞いたので、この工程はとても重要だと思った。金沢市立安江金箔工芸館の展示で、伝統的な金箔を生産するために必要な技術や道具を見て、金箔を製造するにはこんなにもたくさんの道具と技術が使われるのだと思った。このゼミ旅行がきっかけで、工芸品や建造物ができていく過程に対して強く興味をもつようになった。

今回の旅行で得た知見をさらに深めていき、自身の研究に繋げていきたい。

文化財科学ゼミ旅行レポート：松本勘汰

9月2日、3日に文化財科学ゼミのゼミ旅行が実施され、様々な修復現場の様子を見学した。私は最も印象に残った石川県文化財保存修復工房につ

いて記述する。

石川県文化財保存修復工房では、保存修復の作業風景が公開されているという特徴がある。このように保存修復作業の様子が公開されている場所は奈良県にあるなら歴史芸術文化村とこの工房のみであると知った。なら歴史芸術文化村と比較すると、比較的作業の様子を展示する箇所が少なかったように思えるが、作業に使われる道具、手段、期間などの説明が多く、理解しやすい公開スペースの造りになっていたのではないかと私は感じる。修復工房の中に実際に入ることができ、糊の種類について知識を得ることができた。例えば大寒の日に一日かけて60Lの糊を炊き、用途に合わせて発酵させたり、そのまま使用したりするらしい。糊の種類を分けるのは和紙の繊細さが原因であると私は考える。修復工房の中で和紙を手にとった時、繊維が密になった和紙から向こうの景色が透けて見えるような和紙まで、様々な和紙が修復に利用されているため適切な粘度をもった糊でないとい逆に文化財を破損させる可能性があるとい私は考えたのである。繊細な作業工程、科学的な分析・研究をもって修復が行われていることを肌身で実感することができた。

また、私は文化財の防災・被災からの修復について興味があるため、能登半島地震で被災した文化財の修復現場の様子は強く印象に残っている。能登半島地震が起こった1月から2か月の間、文化財関係者が被災地に入ることができなかつたことを知った。もしこの災害と全く同じ被害状況をもたらす災害が梅雨時に起こっていたらということを考えてとき、被災地に入るまでの2か月間、風雨にさらされた古文書にはカビが生え、さらに津波被害があつた文化財は塩害によって状態はさらに悪化していたように思う。

冬であつたためカビ・塩害による影響は少なかつたものの、電気と水道をはじめとするライフラインが遮断されていたため、現地ですることが相当少なかつたのではないかと私は推測する。スクウェルチドライ



石川県文化財保存修復工房 案内板

イング法を用いるとしても脱水用の機械（シーラー）は電気がなければ稼働せず、その場で修復することができないと思うからだ。しかし石川県には保存修復工房があったことで修復活動がしやすかったのではないだろうか。「工房があることで一時的に保管することができ、修復することができた文化財が多くある」と職員の方が話しており、私は強く共感した。富山県で被災した掛け軸がこの工房に預けられ、修復作業がなされていることから、北陸の災害時、文化財レスキューの拠点になりうるのがこの工房ではないかと思う。

文化財保護のレスキューの観点から、地域ごとに工房を設けるのが、いち早く文化財を助け出すための施策と考えることができる。しかし行政の予算・工房に必要な技術者が不足していること、工房が被災地域に含まれていた場合など、様々なリスクが考えられるため現実的ではない。災害現場からの救出スピード・救出方法について研究する余地があるのではないかと思った。

ゼミ旅行レポート：水野七海

9月2日から1泊2日で、ゼミの仲間とともに金沢を訪れた。短い日程であったが、文化財保存や修復、そして金沢の伝統文化を支える現場を直接体験することができ、自分の研究関心に直結する学びを多く得られた。

初日に訪れた文化財保存修復工房は、特に印象に残っている場所の一つである。そこでは障壁画などの修復に実際に用いられる和紙、刷毛、糊といった道具を間近で見ることができた。説明を聞くだけでなく、10年ものあいだ熟成させた古糊を実際に触り、匂いを嗅がせてもらった体験は忘れがたい。糊は最も寒い冬の日に仕込むことで質が高まるといい、その管理や熟成には膨大な手間と時間が注がれているという。古糊は甘酒や梅酒を思わせる独特の香りを放ち、単なる接着剤というよりも、時間の積層が凝縮された文化財の一



金沢市立安江工芸館における金箔加工過程の展示

部のように思われた。私は障壁画の剥落止めに関心を持っているため、膠や糊といった素材に実際に触れたことは極めて貴重で、研究を深める上での具体的な感覚的知識となった。文化財修復は理論や技法だけでなく、素材そのものへの理解と感覚的な経験が不可欠であると強く感じた。

成巽閣で見学した欄間もまた、心に残る体験であった。椿をモチーフとした花鳥欄間は、檜の一枚板に極楽鳥や白梅、椿が両面透かし彫りで表されていた。表裏で主要な枝を共通にしつつ、異なる世界を展開させる構成は、見る角度によって異なる物語が立ち上がるようで実に見応えがあった。さらに欄間の枠を超えて伸び出す枝や鳥の姿は、室内空間を外へと広げ、格式ある場にふさわしい壮大さを演出していた。極彩色の彩色は華やかでありながらも木彫の立体感を際立たせ、建築空間を単に装飾することとどまらない芸術的な効果を生み出していた。欄間という建築部材が、場の格式を示す象徴的な要素となりうることを、成巽閣での実見を通じて理解することができた。

2日目に訪れた金沢職人大学校では、文化財を守るためには高度な技術が必要であると同時に、それを継承する仕組みが不可欠であることを実感した。案内して下さった方の説明からは、文化財を「保存」することが単なる修理にとどまらず、生活の一部として継続的に支える取り組みであることが伝わってきた。金沢の街並みが歴史の重みを保ちながら現在に生きているのは、こうした人々の不断の努力の成果であることを改めて認識した。

さらに、金沢市立安江金箔工芸館・金箔技術振興研究所での学びは、金碧障壁画の保存に関心のある自分にとって特に意義深いものであった。その制作に欠かせない金箔について体系的に理解を深める機会を得られた。金箔の製造工程は、薄さわずか1万分の1ミリにまで金を延ばす高度な技術の積み重ねであり、研究所や資料館での説明や展示を通して、金箔が単なる豪華な装飾ではなく、空間全体の意味や格式を高める象徴的な素材であることを理解できた。これまで書物や論文で知識として学んでいたことが、実物を見学することで具体性を帯び、自分の研究テーマへの理解を確かなものとする貴重な体験となった。

この2日間のゼミ旅行は、文化財保存や修復の現場に直接接触することで大きな学びを得る機会となった。成巽閣の欄間に見られる建築部材の美しさ、修復工房で体感した素材の奥深さ、職人大学校や金沢市立安江金箔工芸館・金箔技術振興研究所で知った技術継承の仕組み。それぞれの体験は、自分の研究関心に直結し、学問的な理解をより実感を伴ったものへと変えてくれた。今回の経験は、今後文化財について研究を深

めていく上で、確かな基盤となるだろう。

ゼミ旅行レポート：鳥越愛梨

2025年9月2日から3日にかけて行われたゼミ旅行で、私たちは石川県金沢市を訪れた。現地では、実際に文化財や伝統技術が保存・活用されている現場を見学し、その重要性を知ることができた。

初日はまず、近江町市場を訪れた。300年もの長い歴史のある市場で昼食をとり、金沢の食文化を体験した。次に、石川県文化財保存修復工房を訪れた。実際に修復作業を行っている様子や道具などを間近で見学した。現場で活躍されている職員さんのお話を聞くことができ、大変貴重な経験となった。その次に、石川県立美術館を訪れた。九谷焼など、数多くの石川県の伝統工芸品や美術品を鑑賞した。その後、成巽閣を訪れた。広々とした縁側と庭園が洗練された空間を作り出し、内部は材料から彩色まで意匠を凝らした贅沢な建物であった。特に2階の群青の間は前田家の美的感覚、財力が隅々まで存分に発揮されていた。そしてそのまま日本三名園の兼六園に足を運び、手入れの行き届いた庭園の設計とその美しさを堪能した。

2日目はまず、金沢職人大学校を訪れた。建築や造園などの伝統技術を担う人材の育成がどのように行われているかを見学し、技術を継承していくことの重要性について学んだ。その次に、金沢市立安江金箔工芸館を訪れた。金沢の代表的な産業である金箔が作られるようになった歴史と生産工程について学び、実際に金箔が使用されている美術品を鑑賞した。美術品だけでなく、食品や化粧品など金箔が様々な分野で広く利用されていることを理解した。その後の自由時間では、ひがし茶屋街にある国指定重要文化財の志摩を訪れた。保存状態がよく、江戸時代から変わらないお茶屋特有の建築を見ることができた。その次に金沢城を訪れ、この城ならではの多種多様な石垣を観察した。復元された五十間長屋の内部は展示室になっており、展示パ

ネルや映像資料などによって、金沢城の発掘調査の様子や内部の建築様式について知ることができた。最後に尾山神社を訪れた。和漢洋の三様式が混用された神門には、上部に美しいステンドグラスが嵌められており、本殿横はレンガ造りの塀があるなど、異文化が積極的に取り入れられている様子がうかがえた。

2日間のゼミ旅行を通して、金沢の歴史や伝統技術・文化について理解が深まったのと同時に、それらを保存・継承していくための取り組みや、どのように観光や教育に活用されているかを学ぶことができた。金沢市で行われている積極的な文化財の保存・活用によって、街全体が活気にあふれていると感じた。かけがえのない文化財を守り、伝えていくことの重要性を改めて理解し、今後の研究のためにも大変有意義な経験をすることができた。

成巽閣・金沢市立安江金箔工芸館について

：今津穂香

今回私たち北野ゼミは、ゼミ旅行として金沢を訪問した。このレポートでは、訪問した施設の中でも、私が特に印象に残っている成巽閣と金沢市立安江金箔工芸館について述べていく。

成巽閣は、私が卒業論文で青色顔料を取り上げようとするきっかけとなった群青の間がある建築物である。今回ゼミ旅行で初めて実物を見ることができ、とても貴重な経験となった。

成巽閣の一階は、かなり自由に中を見学できることができ、成巽閣が作られた「奥方御殿」としての在り方を肌で感じやすいと思った。成巽閣に関しては個人的にも調べる機会が多く、建造物としての特徴は他よりも知っている事が多かったため、それを実際に目で見ることができてとても楽しかった。

前田齊泰が眞龍院、つまり女性のために作ったとされる成巽閣には豊かな色彩で装飾された花鳥が特徴とされ、実際どのようなものがあるのかと探して回った



金沢城



成巽閣 中庭

が、障子ごとに数が増えていく蝶々の装飾や、戸にはめられたガラスに描かれた色とりどりの鳥の絵など、遊び心のある装飾が部屋の一つ一つに見られ、母堂のために建てられたという事を様々な場所で感じる事ができる建築であった。

また、庭もとても印象的であった。寺院の庭は京都を中心に多く見てきたが、成巽閣の庭は緑が多く、縁側が長すぎず、かつ庭を受付に続く渡り廊下で2つに分けていることで視界にちょうど収まるような大きさが、安心感のある空間を生み出していると感じた。庭園の鑑賞はまだあまり詳しくないのだが、最も良い方法は縁側に少し時間を取って座ってみる事だと考えているので、20分ほどつくしの縁庭園の縁側に座ってみた(写真)。ちょうど日が西に傾き始めた時間帯だったので、庭には少し色づいた光が差し込み、緑の陰影がとても美しく、細く走る遣水のせせらぎと鳥の声が耳を撫でるようでとても穏やかな時間が流れているように感じた。これは現地に行かねば分からないことだととても感動した。眞龍院も縁側で同じように庭園を楽しんだのだろうか。

そして成巽閣全体を通して感じたのは、オランダをはじめとした国外の技術がいたるところで見られる事である。群青の間ではその顔料の入手、そして二階にあるギヤマン、ガラスに描かれた鳥の絵はステンドグラスを彷彿とさせる。これらの技術が集まる成巽閣は当時の前田家の権力を垣間見ることができるのではないだろうか。

金沢市立安江金箔工芸館では、金箔ができる工程や箔の種類などを教えて頂き、とても面白かった。また、博物館展示や学芸員の視点から見てもとても魅力ある施設だった。展示常設展示はハンズオン展示となっており、幅広い年代が楽しめる展示が数多くあった。また、特別展示では学芸員の方が直接解説をしてくださったのだが、やはり展示物に対する知識や金沢市の工芸家等の知識を感じられる解説であり、教科書や授業だけでは養うことのできない知識が学芸員には必要であることを改めて感じる事ができた。

今回のゼミ旅行を通じて、今後の研究に対する意欲もより一層増した。この学びを糧に専攻での学習に取り組みたいと思う。

ゼミ旅行 ～金沢～：長江諒太

9月2日から9月2日にかけて北野ゼミで金沢にゼミ旅行として訪れた。そのゼミ旅行1日目は、石川県文化財保存修復工房、石川県立美術館、成巽閣、兼六園を訪れた。

石川県文化財保存修復工房では、保存修理、調査、後継者の育成を行っており文化財を後世に残すことに

大きく寄与していた。一般のお客さんもこの施設に入ることができ修復室の様子を見学することができる。今回は特別にその修復室ともう一つ奥にある第2表具修復室に入らせていただき見学した。そこでは修復作業を生で見学しながら実物の修復道具に触って伝統的な修復方法などを説明してもらった。刷毛はいろいろな動物の毛を使っており、動物ごとに全く柔らかさ細さなどが違い用途ごとに使い分けているのが興味深かった。また、大学外のこのような施設で実際に現場に出ていてこれまで修復に関わっている方に話を聞く貴重な体験をできてとても良かった。

石川県立美術館では、金沢の伝統的工芸品をはじめ絵画、彫刻など多くの美術品が展示されていた。前田育徳会尊経閣文庫では加賀藩前田家に伝わっている文化財が所蔵されていた。金沢に関する展示物だけではなく様々な美術品も展示されており、観覧料を含め老若男女どの層でも鑑賞しやすい印象を受けた。

成巽閣は前田家の奥方御殿であり、加賀百万の文化、工芸品の端を発するものの一つである。正面受付横の廊下を進んだ先に広々とした広間が見える。その広間を中央に左にも右にも「～の間」というような部屋が7つあり、2階も含めると全部で10個の間がある。そこから加賀百万石の絢爛さが見て取れた。

兼六園は日本三大庭園の一つである。印象に残ったのは根上松でこれまで見てきた松の中で群を抜いて形がきれいで存在感があった。霞ヶ池もよかったけど欲を言えば冬に見てみたいと感じた。

旅行2日目は、金沢職人大学校と金沢市安江金箔工芸館を訪れた。

金沢職人大学校では、本科に含まれる9つの科と修復専攻科に分けて職人の技の伝承と人材の育成を行っている。また加賀百万石など独自の輝きと伝統がある金沢の文化を後世に守り伝えるために設置された。その目的に適応した9つの科はそれぞれの専門的なことを学び、修了したときには様々な場面で文化財を守る



ひがし茶屋街

ことに寄与していた。近年の課題になっている後継者不足、それに伴う入学希望者の減少について解決していかねばならないと感じた。これは金沢だけに当てはまる話ではなく日本の問題として文化遺産学を学ぶ私たちも考えていかねばならないと感じた。

金沢市安江金箔工芸館では、金沢が誇る文化である金箔について生成、加工方法、用途などを詳しく理解することが出来る。また、金箔が使用された工芸品、美術品なども展示されており、人間国宝の作品も何点か展示されていた。自分の中で金箔が有する美は日本の文化の中で絢爛さが分かりやすく表れているから好きで、その話を金箔に関わっている館長の話も聞くことができたので、とても貴重な経験ができた。

ゼミ旅行を通して、修復作業をしている様子を実際に見ることが出来たし、独自の文化を持つ金沢の文化に触れることができて大変良かったです。

ゼミ旅行レポート：関谷彩音

私たち北野ゼミ3年生は9月2日(火)～9月3日(水)の2日間、石川県金沢市に行き、石川県文化財保存修復工房、石川県立美術館、成巽閣、兼六園、金沢職人大学校、金沢市立安江金箔工芸館に伺った。そのなかで石川県文化財保存修復工房、金沢職人大学校の2つの施設についての感想をまとめる。

はじめに石川県立美術館の付属施設である石川県文化財保存修復工房を訪れた。石川県文化財保存修復工房は、一部の修復作業をガラス窓越しに見学できるようになっており、ディスプレイやパネルなどが作業や道具の紹介のために用いられていた。私たちは見学スペースから見る事ができる第1表具修復室と、見学スペースからは見る事ができない第2表具修復室の中に入れていただき、それぞれの修復作業に関する説明を受けた。第1表具修復室では膠や生麩糊、糊を塗るための道具などに実際に触れながら剝落止めや裏打ちなどの修復作業について学んだ。また、第2表具修復室では1月にあった能登半島地震の被害の実情と、震災や水害などの被害を受けた地域の文化財を修理・修復することの難しさについて聞いた。その時の、能登半島地震だけでなく日本に起きた災害のことを忘れずにいてほしいという言葉がとても印象に残っている。

石川県文化財保存修復工房の見学の後は石川県立美術館に行き各々展示を見て回った。国宝の色絵雉香炉や指定文化財の九谷焼のほか、現代の作家の作品も数多く展示しており見ごたえのある美術館だった。

2日目には金沢職人大学校に伺った。金沢職人大学校は金沢に残る伝統的な職人の技の伝承を目的として既に技術を持つ職人を対象に研修がおこなわれる場所

で、大工・造園・左官・石工・瓦・建具・畳・板金・表具といったように様々な部門に分けられており、それぞれの空間で実践的な研修が行われていた。このような伝統技術の継承が行われる場所が公的な機関としてあることが、伝統を途絶えさせないようにするために重要であると感じた。現代の技術の発展や文化の担い手不足などによって各地で伝統が廃れていくなかで、博物館施設とは異なるかたちで文化財を守る施設があることを知った。

いずれの施設でも古くから使われてきた道具や技術を使い、天然の資源を利用することを大切にしている。人手不足や機械化などにより技術を途絶えないようにすることが難しいのが現状であるが、金沢市は特に文化を受け継ぐ意識が高いと感じられた。金沢市立安江金箔工芸館があるひがし茶屋街では食べ歩きが禁止されており、観光地では珍しいこの決まりも歴史的な町並みが綺麗に維持されていることに大きな影響を与えているのではないかと考えられる。

2日間金沢で実際に現場を見て現状を聞いたことで、文化財の保存・修復が重要視されていることを実感した。このゼミ旅行で学んだことは今後の自分自身の学びに繋げられる有意義な経験であった。

Ⅱ 新居浜の文化遺産—近代化遺産とその活用を考える—

2025. 9. 2～9. 3

新居浜の文化遺産で学ぶべきこと

担当教員：木許 守

私たちのゼミは、近代の住友財閥の礎を築いたといわれる別子銅山が所在する愛媛県新居浜市を訪れた。別子銅山は元禄年間に開かれて以来昭和48年（1973）に閉山するまで、300年近くに亘って操業を続けた。とりわけ明治以降は日本の近代化に資本の側面で大いに貢献することになるが、その動向をつぶさに見れば、公害問題の解決など近代的な思想形成のうえにも一定の影響があるように思われる。新居浜市においては、その鉱山遺跡だけではなく、それに関連する様々な文化遺産が点在している。また、海浜部では住友化学（株）、住友林業クレスト（株）、住友病院など、別子銅山に関連して起業されたグループ会社の社屋・工場が稼働し、多くの市民がそこで働いている。新居浜市にとっては、住友は切っても切れない関係にある。

新居浜市は、その別子銅山関連の文化遺産の保存と活用にかんがみて、市役所内に「別子銅山文化遺産課」を設けてことに当たっている。このように特定の文化遺産（群）の保存・活用に特化した部署を課の単位で設置している地方公共団体は、ないわけではないが珍しい。このことは新居浜市を訪問したいと考えた重要な動機でもあった。

私たちは旅行前に事前勉強会を行い、別子銅山の見るべきポイントを絞り問題意識を高めるようにした。それらを列挙する。

*閉山した鉱山跡が「マイントピア別子」として運営されている。その観光、学習施設としての活用の実態について。

*「東洋のマチュピチュ」と言われる別子銅山東平地区へのバスツアーが行われ、人気を博している。東平地区とはどのようなところか、鉱山のなかではどのような歴史的位置を占めたか、また現在の観光利用の実態はどのようなものか。

*マイントピア別子に隣接する旧端出場水力発電所、星越町に所在する住友山田社宅などの復元修復事業と活用について。

*住友社員の「作務」により構築されたという山根競技場観覧席が、現在の市民にとってどのような意味をなしているか。

*別子銅山による煙害被害を、住友はどのようにして解決してきたか。

以上のような課題が考えられたが、さらに、文化財

行政学の観点からはより大きな、現実的な課題があることに気がついた。それは、別子銅山関連の文化遺産は我が国にとって重要な価値がある文化財であるが、その多くは住友が所有していることで、その私企業としての立場と、市として保存し活用するという公の立場の折り合いをどのようにつけているかということである。これは、文化財の所有者と行政の関係という一般的な課題と通じるものであるが、新居浜市に特有の課題もあるかもしれないなどと思われたのである。

こうした問題も含め、今回は是非とも別子銅山文化遺産課の職員に様々な課題とその克服されてきた経緯を実際にお話しいただきたいと考えた。実は、私のゼミの2022年度の卒業生で新居浜市に実家がある人がいた。その卒業生のご両親は新居浜市役所に勤務され一時は別子銅山文化遺産課に配属になっていたという。そのような縁を頼って、同課課長の土岐幸司さんと連絡を取ることができた。土岐課長にことの次第を説明、お願い申し上げたところ、とても親切にご対応下さり、同課職員から1時間ばかりのご講演をいただくことや、見学地での解説のほか移動手段についてもご配慮をいただいた。

9月2日（火）、お昼ごろに新居浜駅に降り立った私たちは、土岐課長のほか、同課の秦野親史さん、紀伊知実さんの出迎えを受けた。その後、住友山田社宅に移動し、ここで、秦野さんからこれまでの取組などについて講演いただいた。次に、日暮別邸記念館に移動した。ここでも、同課のお口添えで館長からの解説を受けることができた。翌9月3日（水）の午前中は、山根競技場観覧席、別子銅山記念館、旧端場水力発電所を見学したが、やはりそれぞれのポイントで秦野さ



旧端場水力発電所前にて記念撮影

んが解説してくださった。午前中で同課の方々とお別れし、午後は単独でマイントピア別子を見学後、東平地区の観光バスツアーに参加した。

今回の研修旅行が充実したものになったのは、このように、新居浜市企画部別子銅山文化遺産課の方々の本当に暖かいご支援があったからである。末筆ながら、衷心から感謝申し上げる次第です。

夏期研修旅行報告：竹田頼生

我々は、9月2日から3日にかけての研修旅行で愛媛県の新居浜市を訪れ、新居浜の文化遺産である別子銅山の歴史とその活用について学んだ。愛媛県新居浜市は1691年に開坑された別子銅山が育んだ街であるという。1973年に鉱山は閉山したが鉱山から派生した産業が発展している。その風貌は大きくは別子の山から新居浜の臨海部までの景観、個別的には坑道やトンネル、煙突などの産業遺産として見る事ができた。そんな近代日本の産業発展に大きな役割を果たした歴史的拠点を現地での見学を通じて、単に資源採掘の現場としてだけでなく、地域社会や環境、さらには現代社会における文化財の保存・活用という課題とも深く結びついた存在であることを学んだ。

この旅行で一番注目すべき点は、別子銅山が産業遺産として現在どのように保存・活用されているかという点であると考えた。この別子銅山をそのまま放置すれば風化や崩壊によって失われかねない。しかし新居浜市や住友グループは、鉱山の施設や遺構を保存・整備し、マイントピア別子という観光スポットや東平ゾーンとして一般公開を行っている。

東平地区には東洋のマチュピチュと呼ばれるレンガ造りの施設跡が残されており、バスツアーも行われており、観光イベントを通じて別子銅山の歴史を現代に活かそうとする動きも広がっている。

他に、住友山田社宅や旧端出場水力発電所などは保存と活用のために様々な取り組みが行われ、今後さら

に計画が検討されていることを学んだ。住友山田住宅の中には展示パネルが、旧端出場水力発電所ではそれが稼働していた当時の映像や写真の展示パネルが置かれていた。そして建物の補修や耐震改造など、実際に物理的な保存のための工事も行われた。しかし来訪者が歩きやすいように道が舗装されている部分もあったが、すべての道路が舗装されているではなかった。その理由として挙げられるのが費用の問題である。端出場の発電所の耐震工事や周辺工事は文化庁の補助金を受けることができたが、住友山田社宅は文化庁からの補助が出ず、国土交通省の空き家対策という項目で補助を受けたものの、必要な整備のすべてを対象にできたわけではない。このように別子銅山文化遺産のすべてを修復・改修して保存・活用するのは費用の問題で難しいことがあると新居浜市別子銅山文化遺産課の方々がおっしゃっていた。

今回の研修旅行を通じて、別子銅山が単なる資源採掘の場にとどまらず、日本の近代化や新居浜の発展に大きな役割を果たしたことを学んだ。そして、閉山後の現在においても、その遺構は産業遺産として保存・活用が試みられている。しかし現場では、風化や老朽化を食い止めるための保存に要する膨大な費用が課題となっており、すべての施設を完全に修復することは難しいのが現状である。住友山田社宅や旧端出場水力発電所の整備に見られるように、補助金制度や地域の工夫によって少しずつ保存が進められているが、そのためには継続的な文化財の活用と資金の確保が不可欠であると感じた。今後は観光や教育の場としての価値をさらに高め、地域社会が一体となってその歴史を次世代に伝えていくことが重要であると感じることができた2日間だった。

夏期研修旅行報告：菅原颯太

私は、愛媛県新居浜市で、主に住友家が残した産業遺産である別子銅山に関する建造物や当時の様子など



別子銅山東平エリア 貯鉱庫跡



東平の山と新居浜市街地

を、地元に住む市役所の方やガイドの方の開設・案内を通して、事前学習してきた内容よりも一層深く知ることができた。中でも、私は住友家の行なった銅山の開発が進むにつれて起こった煙害対策を地域の住民と協議しながら克服していくまでの過程に特に興味を持ったのでこれについてまとめていきたい。

別子銅山は、元禄3年に、住友家が銅山越えをするときに露頭を見つけ、翌年の元禄4年から江戸幕府の許しを得て昭和48年までの283年間掘られ続けた。

煙害問題は、江戸時代から明治時代初期ごろまでの手作業中心の時代には、あまり目立っておらず、それよりも森林伐採や、河川の汚染などへの苦情の方が目立っていた。その後、近代技術の導入から効率化が進み増産体制を加速させていった。そこで、銅の運搬に用いられた鉄道や別子銅山から移転した新浜製錬所が稼働していった。これにより住友の鉱業部門の業績は軌道に乗っていったが、新浜製錬所の煙害問題は、それまでもあった河川の汚染問題などを、遥かに上回る深刻なものであったため農民達の抗議が激しいものとなった。これに対して住友側は広瀬幸平派などが煙害問題を否定していたが、広瀬の辞任を機に伊庭貞剛が、住友の中心となり、煙害対策として瀬戸内海に浮かぶ沿岸から20kmほどの地点にある四阪島に製錬所を移すことを決めた。また、同時に長年の煙害によって禿山と化した別子山に自然を取り戻すための植林事業も始まり、毎年100万~250万本の植林が行われ現在には別子山には自然が取り戻されている。

植林事業は成功され、現在の住友林業の基盤となったが、一方で、四阪島に移された製錬所での煙害問題な期待通りには行かず、海上に散布された煙は、風に乗ってより広地域に流れ込んでしまったのである。この四阪島からの煙害問題では、麦などの農作物に甚大な被害をもたらした、農民側からは製錬所の稼働中止や賠償を求められ、協議の結果、煙害が収まるまでは賠償金を支払うということになった。また、製錬所で生産する銅の量にも規定が定められ、特に農作物にとって重要な10日間には、製錬所を稼働中止することが決定された。

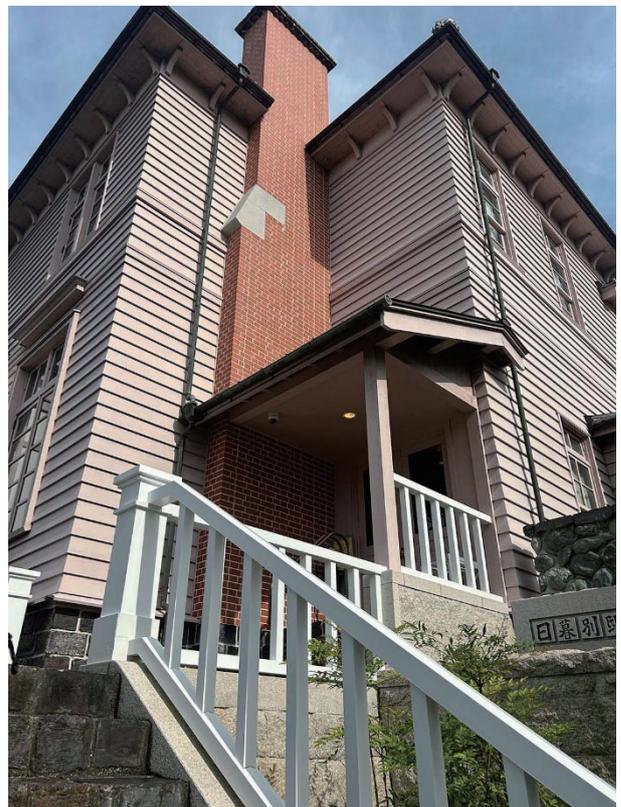
その後、1本の高い煙突から、6本の低煙突に変更するなどの模索はあったが逆効果となり、四阪島で働く従業員やその家族に被害を出してしまい元の1本に戻った。排気ガスはピーク時に比べると減少したが決定的な解決策が見つからないままであったが、大正14年にドイツ人技師であるペテルゼンが開発した硫酸製造法によって製錬する際に出る硫黄の70%を硫酸に変えることができるようになり、その後、アンモニア中和法も導入されて別子銅山の煙害問題は解決に成功した。

これらの背景から住友家は、当時の考えとしては画期的な植林事業や長きにわたる煙害問題対策などに続き、汚水を元に戻す事業や水力発電所の運用などといった現在のSDGsの多くの項目に当てはまることを先どってきていると、研修を通して理解することができた。

新居浜における文化財の活用に関して：成田蒼司

9月2日と3日に行われた夏季研修旅行では愛媛県新居浜市を訪れた。新居浜市は瀬戸内海に面した人口11万人ほどの町であり、沿岸部には住友各社の工場等が集まり、山間部には住友所有の鉱山として江戸時代から昭和にかけて住友を支え続けた別子銅山がある。今回の研修旅行では新居浜市の別子銅山文化遺産課の方々の案内の下、新居浜の産業遺産に関して保存活用の観点から学んだ。

1日目は住友山田幹部社宅及び日暮別邸を巡った。住友山田幹部社宅は昭和初期に郊外住宅の発想により開発された社宅街であり、所長宅や外国人社宅等の幹部社宅6棟の整備が進み、内部には当時の様相を残したうえで説明板が設置されるなど、資料館としての機能も有している。また、1棟はボランティア団体の拠点として整備、使用されているという。社宅の周辺は駐車場から社宅までの道を舗装するほか、交差点の設置など整備が進んでいる。案内をして下さった新居浜市別子銅山文化遺産課の秦野親史さんによると、保存



日暮別邸

の面に関して市民による保存活動組織の世代交代が進んでいないことが課題であり、また、文化財としての保護の理念を伝承していくためには教育が重要であるとのことであった。

日暮別邸は四阪島での操業初期に建設された住友家の別邸である。老朽化が進んだ日暮別邸を四阪島で長期にわたり保存することが困難であることから、住友グループ各社の協力の元、この地に移築され、現在は記念館として市民が見学できるように元の姿を忠実に再現したうえで改装されている。

2 日目にはマイントピア別子を中心とした産業遺産を巡った。マイントピア別子は端出場エリアと東平エリアがあり、端出場では水力発電所跡を見学したのちに道の駅と坑道をつなぐトロッコに乗り、坑道内を見学した。坑道内は子供から大人まで参加できるように改装されている。駅の休憩所には新居浜南高校ユネスコ部作成のガイドブックが設置されているほか、愛媛県が主催の「高校生による歴史文化PR グランプリ」においてユネスコ部が出場した際のプレゼン動画が流されているなどユネスコ部による精力的な活動の成果を確認することができた。

新居浜を代表する別子銅山や関連する産業遺産は住友の所有であることから、行政による保存整備が進みにくいという点がある。しかし、日暮別邸や別子銅山記念館のように住友グループが主体となり、産業遺産の保存活用を行っている。また、教育に関しては新居浜では郷土学習が推進されているほか、新居浜南高校のユネスコ部のように高校生による活動も盛んである。

文化財の保存には後の世代への継承が必要であるが、今回の研修旅行では企業による文化財の保存活用や小学生による郷土学習、その他教育活動による文化財の継承、精神的側面の伝承等の興味深い事項について新居浜市の一例を現地でもより深く学ぶことができた。

新居浜市 別子銅山文化遺産保存の現状と課題 ： 柑谷朋哉

愛媛県新居浜市は、別子銅山を中心とした産業遺産の保存と活用に積極的に取り組んでいる。今回の研修旅行では、現地を視察することで、行政組織の特色、保存の実態、財政的課題、さらに今後の方向性を具体的に把握することができた。

まず注目すべきは、新居浜市役所には文化振興課とは別に「別子銅山文化遺産課」を独立して設置されている点である。別子銅山は300年近い歴史を有し、対象エリアも広大である。そのため、資料整理や史実調査、企業との協議、保存整備、情報発信といった多岐にわたる業務を専属的に担う体制が不可欠であるという。特に、遺産の大部分を所有するのは住友グループ

各社であり、行政としても専属部署を設けることで信頼性を担保し、円滑な協働を実現している。ここには鷲尾勘解治が掲げた企業と地域社会の「共存・共栄」の理念が現代的に継承されていることが窺える。

最初に訪問した住友山田社宅群は、鷲尾の地方厚生策の一環として建設された歴史的建造物であり、そこで新居浜市職文化遺産課の秦野親史さんから話を伺うことができた。現在は監査役宅や外国人社宅、幹部社宅が現存し、全て登録有形文化財に登録されている。令和3・4年(2021・2022)度には耐震補強や内部補修、展示・照明設備の設置などが行われ仮オープンに至った。しかし、駐車場やトイレなどの周辺整備が未整備である点や、メインであるマイントピア別子からかなりの距離がある点、知名度が低い点など課題は多い。

さらに明らかになったのは、財政面における制約である。登録有形文化財は文化庁の補助対象外であり、山田社宅群の修復は国土交通省の空き家対策事業を活用したという。しかし、この制度は令和7年(2025)年度に終了予定であり、今後は地方創生関連の補助金への切り替えが模索されている。文化財保存を安定的に進めるためには、単一の制度に依存せず、複数の財源を柔軟に組み合わせる戦略が求められることが示唆された。

以上の踏査を通じ、今後の保存活用の方向性として幾つかの課題が浮かび上がると思う。広大な社宅跡地には説明板が少なく、まだまだ空き地が広がっている。現状では来訪者に歴史的価値が伝わりにくい。

私は、ここに限らずAR技術を活用して往時の景観を再現するなど、デジタル手法による展示は有効な手段となると考えている。また、旧社宅を宿泊施設やカフェとして利用するなど、滞在型観光資源化を進めることができれば、文化財を保存しながら地域振興にも結びつけることができるかもしれないと考える。

結論として、新居浜市における別子銅山文化遺産の事例は、文化財保存が単なる歴史的遺産の維持にとど



住友山田社宅跡地

まらず、企業と行政の共同体制、持続的な財源確保、そして観光振興を組み合わせた包括的な取り組みであることを示している。つまり、文化財保存は過去を守る営みであると同時に、地域社会の将来を形づくる戦略的課題であることと考えることができた。

夏季研修旅行報告文：中杉あいり

私たちは愛媛県の新居浜市にある住友グループの礎となる近代遺産を見学した。

1 日目は、山田社宅は住友鉱山の幹部社宅であり、三棟の幹部社宅と二棟の外国人技師の社宅をみることができた。他にも長屋の社宅があったが、こちらは解体されており、現在は見ることができない。3 棟の幹部社宅にはそれぞれ個性があり、地位によって分かれていることを見て取ることができた。

日暮別邸は四阪島の建物を移築復元したもので、建物の周りの環境も当時に近い状態にしている。建物を解体する際に部材に番号を振ることで、内部も元の状態に復元している。展示としては1階部と2階で、1階は家具の配置等当時の状況を再現し、2階は日暮別邸に関する資料を展示している。

1階では解説板が十分にあるわけではないが、当時の様子をうかがい知ることができる。2階では四阪島の煙害克服の歴史や当時の人々の様子を展示しており、写真によって使われていた当時の部屋の様子を説明していた。建物の屋根はふき替えており、井桁の瓦もある。鍛煉瓦を使用している外側の階段や大煙突の底部は鍛煉瓦の特徴を伝えており、灰色で鉄のにおいがしていた。鍛煉瓦は再利用されており、利用できないものは捨てられているという。建物は西洋の建物の特徴を踏まえつつ、日本式の生活ができるように工夫されていると感じた。バルコニーは当時、精錬所の方を向いており、北向きであったことから、同じく北向きにしてある。日暮別邸は観光活用ができるが、それより住友の歴史を語るうえで、重要な建物となっている。



日暮別邸 展望台

当時の様子を復元することは今は行くことができない四阪島の様子を伝えるものとなっており、地域住民にとって歴史を知ることができる一助になると私は考えた。

2 日目に最初に訪れたのは別子銅山記念館である。別子銅山について解説していた。鉱山をどのように掘っていったのかを示した模型があることで、わかりやすかった。また、写真で当時の住民の様子を映すことで、非常に楽しそうと感じた。

山根グラウンド観覧席は住友の方たちのボランティアによって、作られたものである。今はお祭りの時期には観覧席として今も利用されており、地域住民にとって、大切なものである。

旧射出場水力発電所は、山の反対側の川からおおよそ500mの落差を利用して水力発電を行ったという。残されている発電機や変電機は当時使われていたものである。建物全体を使い、発電所について構造的に知ることができるようになってきている。なかなか入ることができない発電所について知るきっかけになると思った。

マイントピア別子は楽しみながら鉱山について知ることができる。実際に使用されていた坑道の中を進むことで順番に別子銅山の採掘の歴史を知ることができる。子ども向けのアスレティックもあり、鉱山の探索気分を楽しむことができる。観光面をもちつつ、学習面も持ち合わせた施設で鉱山について学ぶことができることが分かる。

今回、住友グループの礎となる新居浜市を巡った。地域住民は住友グループに何かしら関連する産業についているという。関連の産業遺産が地域住民にとって必要なものとなっていったことがわかる。

別子銅山とその関連文化遺産を見学して

：小島 七海

我々は9月2日から9月3日にかけての研修旅行で愛媛県新居浜市を訪れ、住友グループの基となる別子銅山を中心に見学を行った。

1 日目は新居浜市別子銅山文化遺産課の泰野親史さんの講義を受けたあと住友山田社宅を見学した。住友山田社宅は当時の外観を残しつつ耐震工事を行ったり、内装をそのまま残しつつリフォームされていた。これらの資金を集めるのにはかなり苦労し、さまざまな方法を考えた文化遺産課の方が仰っていたのを聞いて、行政の仕事のやり方についてその一端を知ることができた。特に資金繰りに関しては直接話を聞かないとわからないことまで聞けたのでとても有意義な時間になった。これからも山田社宅周辺の道路整備やトイレの整備などにお金が掛かってくるとのことで、その資金集めを現在行っておりそこで苦労していると知り資金

面での問題点を発見することができた。

その後、日暮別邸を見学した。現在の日暮別邸は元あった日暮別邸が老朽化により移築が行われたものでその移築、改装プロジェクトに関する動画を日暮別邸内で視聴できたことで当時の文化や歴史を身近に感じることができた。移築された日暮別邸には元の日暮別邸を解体した資材から造られているためこの移築、改装プロジェクトにはとても感銘を受けた。

2 日目には山根公園グラウンド観覧席を見学し、観覧席を作ったのが住友の社員で奉仕活動として作ったと聞いてかなり驚いた。奉仕活動として行うには大規模だと私は考え、地域と住友の関係に強いつながりがあることを実感した。

その後マイントピア別子を訪れ、旧端出場水力発電所を見学した。旧端出場水力発電所では当時実際に稼働していた発電機を見学することができたのはとても良い経験だと感じた。旧端出場水力発電所の外観は洋風の西洋建築になっているが、黒くなっているのは戦時下で空襲に備え空から見たときに迷彩のような効果があると説明を受けた。

その後、観光坑道にトロッコで向かった。坑道内はかなり涼しく夏場であるのにもかかわらずとても快適に過ごすことができた。坑道内には発掘当時を表したモニュメントや映像があり学習施設となっていた。そのほかにも子供が楽しめる遊具などもあり観光活用がうまくいっている施設になっていた。特に観光活用的一面で見るとトロッコで向かう移動の動線や坑道内のレイアウトなどはかなり良い活用方法だと思い、多くのことを学べた。

坑道を見学したのちに東平ツアーに参加した。ツアーではバスで東平エリアまで向かいガイドさんによる説明があったため解説板等を読むだけではわからない情報まで知ることができた。東洋のマチュピチュと呼ばれていることが納得できるほど高度が高くその景観には圧倒された。



端出場水力発電所

今回はこの旅程に沿って巡ったが、別子銅山関連の文化遺産を余すことなく見学できる研修旅行となった。これは、新居浜市別子銅山文化遺産課の皆様のほか多くの方々の協力のおかげであり、感謝したい。

新居浜・別子銅山の文化遺産活用について

：村上 征太郎

今回の文化財行政ゼミのゼミ旅行では、愛媛県・新居浜市にある別子銅山を訪問した。1 日目は、別子銅山で働く住友の社員が居住していた住友山田社宅と、明治期の住友家当主であった住友友純が煙害対策のため、四阪島に建設された銅製錬所に寄り添うために建てさせた別荘である日暮別邸を訪れた。山田社宅では、新居浜市の別子銅山文化遺産課職員の秦野親史さんから別子銅山の歴史や、新居浜市が行っている文化遺産としての活用について話を聞いた。日暮別邸では、四阪島に建てられていた製錬所や、別邸の建築様式、建てられた意義について学んだ。

2 日目は別子銅山で使う電気を供給した端出場発電所や、鉱山開発時に掘削された坑道を模した見学施設があるマイントピア別子、レンガ造りの建造物が立ち並ぶ景観から「東洋のマチュピチュ」と呼ばれる鉱山貯鉱庫等の、別子銅山が操業していた時期に使われていた遺物の数々を見学することが出来た。

私が見学した中で特に関心を持ったのは、住友山田社宅である。

山田社宅は、別子銅山で働く従業員が住むために建てられた数ある社宅のうちの1つであり、住友幹部社員やお雇い外国人といった別子銅山従業員の中でも会社上層部に位置する社員の住居である。別子銅山の閉山に伴い、大多数の社宅は老朽化や山火事の要因排除といった理由のため取り壊されたが、山田社宅は銅山を管理していた住友金属鉱山から新居浜市に寄付されたため現在まで遺されている。

山田社宅の見学では、上記の秦野さんの講義を受け



山田社宅

た。講義の中で印象に残ったのは、別子閉山後、住友が行った地域振興事業の話である。銅の採掘量が減少を続け住友本社では新居浜からの撤退が検討され始め中、別子鉱山の代表を務めていた鷲尾勘解治は、後に何も残さず新居浜の地を去る事は住友のすべき事ではないと主張した。結果として新居浜の街は、住友の助力による都市開発や住友関連企業の工場設置などの振興策が功を奏し、瀬戸内地方でも有数の工業都市として現在も栄えている。別子に比肩する規模を誇った足尾銅山を有していた足尾が現在は山間の一集落となっていることから、新居浜の発展に住友が関わったことがいかに重要であったかが窺い知れた。

新居浜市別子鉱山文化遺産課では、別子銅山関連の文化遺産を活用して新居浜や銅山の歴史を発信し、未来へ伝えていく取り組みが行われている。地域の学生による別子銅山研究の部活動などが行われており地域への浸透では一定の成果を上げている。一方、課題としては、多くの文化遺産の現場に共通している事であるが、人材と資金の不足がある。特に費用の確保では、文化庁から文化遺産保護の補助金が出ないため国土交通省からの空き家対策用資金を使って維持費に充てているという話は、地方文化財行政の苦しい懐事情が察せられた。同時に、資金確保のためにあらゆる手を使う柔軟さがあるのだなと驚きも感じた。また、別子関連の文化財は大部分が住友グループの所有になっているため、活用の際には企業側との折衝が必要になる。個人や団体等が所持している文化財と行政の関わり方について、1つの事例を知ることができたのは良かったと感じる。

今回のゼミ旅行では、文化財行政の現場の実情の一端に触れることができた。非常に貴重な体験をすることが出来たため、自分の研究に生かしていけるようにしたいと思う。また、新居浜の土地柄にも興味を沸かしたため、再び訪れてみたいとも感じた。

愛媛県新居浜市を訪れて：坂井志乃慧

私たちは2025年9月2日から3日の2日間、研修旅行で愛媛県の新居浜市を訪れ、新居浜市の文化財との関わり方を学んだ。

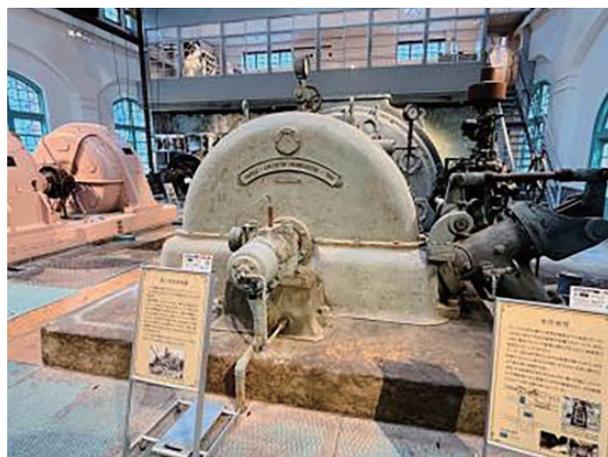
新居浜市は愛媛県の東部に位置しており、私たちはその中の住友山田社宅、旧住友共同電力監査役社宅、日暮別邸、山根公園グラウンド観覧席、旧端出場水力発電所、マイントピア別子を2日間かけて見学した。見学には新居浜市別子銅山文化遺産課の方々のご協力を得ることができ、全体的に充実した見学となった。

見学の中でも印象に残ったのは山根公園グラウンド観覧席と旧端出場水力発電所での見学であった。

山根公園グラウンド観覧席では実際に現場で起こっていたことを直接新居浜市別子銅山文化遺産課の秦野親史さんから聞くことができた。山根公園グラウンド観覧席とは新居浜市角野新田町の国領川に面する敷地に建設された競技場の観覧席である。人頭大の石を低い石垣状に積んで、階段状の観覧席を造るものである。その外観の美しさもさることながら昭和3年(1928)に当時住友別子鉱山株式会社の最高責任者であった鷲尾勘解治が主導して当時の社員の労働奉仕によって建設されたことを知ると、鉱山での多様な生活の一部に触れる思いがした。平成21年(2009)には国の登録有形文化財に登録された。そこでは毎年開催される新居浜太鼓祭りのメインイベントである「山根公園統一かきくらべ」が開催されるのだが、数年前までは観客による席取りの問題を抱えていたのであった。席取りについては、レジャーシートを広げる際に石材を引き抜いたりする行為があったが、今は文化財としての啓発を徹底しているという。また、草刈りなどの「山根公園統一かきくらべ」へ向けた整備のタイミングも知ることができた。これらのことは現地直接山根公園グラウンド観覧席に関わっている人からしか知ることができなかった情報であると思った。現地・現場の現状を実際に見たり、聞いたりすることの重要性を改めて



別子銅山文化遺産課の方々による講義



旧端出場発電所内のタービン

実感することができた。

旧端出場水力発電所では秦野さんのある発言が印象に残った。旧端出場水力発電所はマイントピア別子の対岸にある水力発電所であり、明治後期の別子銅山急激な電力需要の増大に対応するため明治 45 年(1912)に建設されたものである。平成 23 年(2011)には国登録有形文化財に登録されている。ここで印象に残ったある発言とは「写真をたくさん撮って是非 SNS で拡散してください」というものであった。何度も仰っていたことから「知ってもらいたい」という気持ちが様々な活動の根底にあるのだと思った。

この 2 日間を通して学んだことは多くあったが、特に文化遺産を扱うプロフェッショナル側の方々がどのような思いを抱いて文化遺産の情報を発信し続けているのかを考えることができた。私が行いたいと考える研究はプロフェッショナル側ではなく一般人側のことであるが、今回の研修旅行を経て双方の思い、考えや実際に起きていることを直接知る必要があると学んだ。今後の研究に活かすことのできる、大変有意義な研修旅行であった。

夏季研修旅行報告文：山田 ひなた

今回の夏季研修旅行では、9 月 2 日から 3 日にかけて愛媛県新居浜市を訪れた。新居浜市の文化遺産に触れ、印象に残ったことや学んだことについて述べていく。

1 日目は、はじめに別子銅山文化遺産課の方々による解説を受講した。別子銅山産業遺産の歴史だけではなく、保存活動組織の高齢化による文化遺産の伝承の難しさや保存にあたっての補助金の問題など、行政的な話も伺うことができ、近代化遺産の保存・活用につい



日暮別邸から四国島を望む

での理解を深めることができた。この解説の後、住友山田社宅と日暮別邸記念館を見学した。

住友山田社宅周辺の整備は、補助金との兼ね合いにより 1 部分のみ行われている状態にあり、解説で伺った構想と現実のズレを体感し、文化財保存の難しさを感じた。日暮別邸は、元々四国島にあったものを、移築したものであるが、解体の際に使える資材を分別し、それらをそのまま移築に用いており、四国島にあった当時の雰囲気を感じられるようになっていた。また、展望台からの景色はとても素晴らしく、天気が良好であったため、北には四国島、南には社宅跡と別子銅山のあった赤石山系を望むことができた。当時の写真と比べると、異なる部分も多いと思うが、個人的には新居浜の歴史を一番に感じられる場所であったと思う。

2 日目に訪れた中で、印象に残っているのはマイントピア別子である。観光坑道へは、鉱山で使用されていた鉄道を模したトロック列車に乗って向かった。坑道内では、採鉱や運搬など当時の人々が行っていた作業全般が人形によって再現されており、江戸時代から近代にかけての技術の変遷を視覚的に理解することができた。それだけではなく、湧水の汲み上げやエレベーターで地下 1000m を疑似体験出来るコーナーもあり、飽きることなく誰もが楽しめる施設となっていると感じた。文化財の保存・活用の視点においてとても勉強になった。

東平エリアは、バスツアーに参加し、最盛期には約 5,000 人の人々が暮らしていたとされる鉱山町の遺構を見学した。標高約 750m の山中に位置するこの地域には、索道基地跡、貯鉱庫・選鉱場跡などが残されており、山肌に広がる石積みやコンクリート構造物は、当時の産業活動の規模を物語っていた。集落跡には学校や病院などの施設があったことから、山奥に形成された鉱山都市がいかに自給自足的な機能を備えていたかを知ることができた。さらに、残っている石垣は崖のギリギリまで築かれており、限られた地形を有効に活用していたことが感じられた。地元ガイドの方からは、遺構の説明に加えて東平に白樺が生えている理由など、詳細な話もうかがうことができ、地元の人々や当時の姿を知っている人から話を聞くということの重要性について改めて感じることもできた。

この 2 日間の研修旅行では、様々な文化財の保存・活用の実態に触れ、学ぶことができ、とても貴重な体験であったと感じる。今回得た新たな知見を今後の学習においてもうまく活用していきたいと思う。

Ⅲ 美濃とその周辺の遺跡と関連施設の考古学的踏査

2025. 9. 4～9. 5

はじめに

担当教員：國下 多美樹

考古学ゼミでは、遠隔地の遺跡や施設を訪ね、現地の調査者・研究者の指導をえながら遺跡に触れ、また人的交流を図る目的で研修を実施している。今年度は、岐阜県北西部を中心に、愛知県までの範囲で、古墳時代、古代、近世の主要史跡と関連する資料館、博物館を訪ねた。踏査は、基本的に電車とマイクロバスを利用した。初日は、岐阜県不破郡関ヶ原町、大垣市域、2日目は岐阜市、愛知県犬山市を対象として踏査を行った。なお、今回の踏査では、中井正幸氏（岐阜聖徳学園大学特別研究員）に同行いただき、現地の解説とともに、大垣市歴史博物館で講話を頂戴した。

行程：9月4日（木曜日） 8:20 京都駅に集合。8:37 発 JR 新快速、普通を乗り継いで関ヶ原駅着、10:30 マイクロバスに乗り継いで不破関ヶ原資料館、不破関跡を見学した。不破関跡では、段丘崖の高低差を巧みに利用する状況を現認できた。次に南下して12:20 から史跡西高木陣屋跡資料館を見学し、文献・絵画史料が豊富で史跡指定に結びついたことなどを学んだ。岐阜関ヶ原古戦場記念館で昼食をとり、14:45 史跡昼飯大塚古墳を見学。同古墳では調査と整備を担当された中井氏より、整備にかかわるさまざまな試行錯誤と経験談を拝聴した。終了後、大垣市歴史博物館で美濃の古墳の変遷と立地、交通の関係について講話をいただき、展示見学した。この日は大垣駅前に宿泊し交流を深めた。

9月5日（金曜日） 9:00 マイクロバスに乗り。岐阜市歴史博物館で特別展「岐阜城と織田信長―発掘成果から考える岐阜城の姿」を見学。近世初頭の網羅的な

出土品の質・量に圧倒される内容であった。岐阜城居館跡見学後、移動。11:20 琴塚古墳、12:40 坊の塚古墳、13:20 東之宮古墳到着。犬山城を眼下に見下ろす好立地を確認、その後の活用も学習した。そして、14:40 青塚古墳に到着、服部哲也氏（ニワ里ねっと）のご案内で現地見学をした。史跡の活用と維持管理の新しい方向性について示唆的な学びとなった。

なお研修に先立ち事前に「見学のしおり」を作成し、現地見学の事前学習とした。執筆分担は、歴史的環境、弥生時代：岩尾侑真、古墳時代：平野葵依、古代以降：谷野葵帆、不破関跡：上江洲遙斗、西高木屋陣屋跡：木和田快、大垣市歴史民俗資料館：櫻井成騎、史跡昼飯大塚古墳：山中楓大、史跡美濃国分寺跡：音羽香澄、岐阜市歴史博物館：金城利輝、坊の塚古墳：安國有真、琴塚古墳：木村未生、東之宮古墳：國下、衣装塚古墳：山口匠、青塚古墳：宮本凱成で、編集は平野・國下が行った。

以上、2日間の研修旅行の最大の成果は、現地研究者による詳細かつ具体的な解説によって、遺跡の考古学的成果と歴史的意義、そして活用のポイントを短時間で知ることができた点である。中井正幸氏および史跡、資料館等でご対応いただいた各位に感謝申し上げます。

なお、本報告は印象に残った遺跡を対象に、報告文と写真を掲載する方針となったため、必ずしも全ての研修地の内容が報告されていない。参加者が最も印象に残った遺跡は、昼飯大塚古墳である。報告文を読むと、直接整備に関わった中井正幸氏の調査と整備に欠けた熱意に感銘したことがよくわかる。



関ヶ原駅集合写真



不破関資料館

ゼミ旅行レポート：上江州遙斗

今回のゼミ旅行では、美濃・尾張地域に赴き、さまざまな遺跡や施設に訪れた。この地域は古代から交通の要所として発展してきた土地であり、その役割を今に伝える遺跡の一つが不破関跡である。本稿では、不破関跡の見学を通じて学んだことを述べたい。不破関は岐阜県不破郡関ヶ原町に位置している古代に設けられた関の一つである。関とは、交通の要所に設置された人や物の往來を管理するための施設であり、政治的・軍事的にも重要な役割を担っていた。東山道に置かれた不破関は鈴鹿関、愛発(あらち)関(のちの逢坂(おうさか)関)とともに、三関(さんげん)に数えられ、その中でも特に重視されていた。

不破関跡には現在も当時の土塁の一部が残されており、敷地内には不破関資料館が建設されている。資料館には遺跡から出土した瓦や土器などの資料が展示されており、不破関の歴史や機能について理解を深めることができた。また、資料館の展示を通じて、不破関にまつわる歴史的事件や現在の文化との関連についても学ぶことができた。例えば、不破関を境にして関西弁が使われ始めることや、お雑煮に使われる餅の種類(丸餅と角餅)が分かれることなどは、当時の地域的な境界が現代の文化にも影響を与えていることを示しており、非常に興味深かった。

さらに、資料館の見学に加えて、中井正幸先生からも不破関に関する詳細な解説をうかがうことができた。特に印象的であったことは、不破関の復原模型を通して、西側と東側で防御の在り方が異なる点について学んだことである。西側に藤古川が流れており人の出入りが少なかった一方、東側には東山道が通じて人の往來が多かった。そのため、東側にはより堅固な設計になっていたと考えられている。このことから、不破関は単なる防御施設にとどまらず、その立地条件や交通事情を踏まえて設計されていたことを理解することができた。

中井先生を通じて、専門的な知識を踏まえながらその背景について、単なる遺跡見学以上の理解を得られた。今回の見学を通じて、不破関が果たしてきた歴史的役割だけでなく、現代の文化や地域差にもつながる深い影響について学ぶことができた。古代の交通と政治の要所が、今もなお私たちの生活や言語、食文化に影響を与えていることを実感した。また、現地に実際に訪れることで遺跡の大きさや周辺の環境についてより深く考えるきっかけとなった。今後もこのような現地調査を通じて、本だけでは得られない地域ごとの特色を肌で感じる機会を大切にしていきたいと感じた。

昼飯大塚古墳について：山中楓大

今回の研修旅行で訪れた、岐阜県大垣市にある昼飯大塚古墳について述べていく。昼飯大塚古墳は、岐阜県最大規模の前方後円墳で、築造年代は4世紀末である。墳丘は三段築成で、後円部頂上に粘土槨、木棺直葬、竪穴式石室の3つの埋葬施設が同じ墓壇の中にある三棺合葬の形態が特徴的である。

まずは、昼飯大塚古墳を見学した際の自身の所感を、岐阜聖徳学園大学特別研究員の中井正幸先生から聞いたお話を織り交ぜて述べていく。昼飯大塚古墳は2000年(平成12)に国史跡となり、現在は保存整備により墳丘が修復されていて、後円部の一部分は葺石と周溝が復元されている。実際に史跡公園を訪れると、まず整備された後円部が目に入った。後円部復元ゾーンの一段目と二段目には円筒埴輪が設置されていた。気になって一部埴輪を観察したところ、埴輪によって段数が異なり4段と5段のものがある。透かし孔は方形で3段目に2つ開いているものが多かった。突帯は2003年刊行の発掘調査報告書にあるa2類やb1、b2類に似た形状をしていて、外面調整は断続的なタテハケやヨコハケ、中には無調整のものもあった。実際に出土した円筒埴輪は、タテハケの一次調整にヨコハケの二次調整を基本とし、内面にはヨコハケとナナメハケが確認できる。口縁部も大きく外側に曲がるものとそうでないものがあり、実際の埴輪にも同様の特徴がみられるため、実際の出土例を参考に埴輪が復元されていることがわかる。また、中井先生によると埴輪の設置の際に、墳丘1段目の埴輪は2段目よりも埴輪の間隔を広くしていて、埴輪の復元は発掘成果により3種に分類された実物の埴輪を参考にしているとのことだった。その他、私はスロープ部北側の埴輪列が南側の埴輪列より密に並んでいた点に注目した。そのきっかけは、中井先生の現地解説で聞いた「古墳を見せるための工夫」であり、北側の埴輪列が他より密に並べられているのは、中井先生の仰る「見せるための工夫」の一環



不破関跡の地形を見る

であると私は考えた。

葺石は群馬県高崎市の保渡田八幡塚古墳で子供向けに行われた葺石設置体験を取り入れて、子供たちに設置してもらったものが現在の葺石で、「葺く」というよりも「積む」形に近いという。このように、整備事業の一環として作業の一部を一般の人に担い、体験してもらう取り組みは、埴輪ではあるが紀伊風土記の丘でも行われている。埴輪作り体験として、参加者を募集していて、参加者の作った埴輪は実際に墳丘に並べられる。昼飯大塚古墳の場合は整備作業が発掘調査の成果に基づいて行われるため、一般の人は事業に参加するだけでなく古墳自体の知識も得られるというメリットがある。

葺石や埴輪だけでなく、中井先生から 20~30 cmほどの保護層をあえて設けず、現地の解説板をあえて少なくするといった整備の上で意識していた点を伺った。これは、後々調査が行われることを考慮し、「整備作業がゴールではない」という考えに基づくもので、当事者ならではの現実的なお話を伺うことができた。また、本墳からは家形埴輪を含む多量の形象埴輪が出土している。今回の研修旅行で得られた知見とともに、これからの研究に役立てていきたい。

〈参考文献〉

大垣市教育委員会 2003『大垣市埋蔵文化財調査報告書 12：史跡 昼飯大塚古墳』大垣市教育委員会
中井正幸 2005『東海古墳文化の研究』雄山閣 p. p. 284-296

「国指定史跡 昼飯大塚古墳」『大垣市公式ホームページ』<https://www.city.ogaki.lg.jp/0000000695.html>
(最終閲覧日 2025年9月25日)

ゼミ旅行感想レポート：櫻井成騎

今回は2025年9月5、6日の2日間で様々な古墳や資料館に実際に自分の足で見て周り、活用や管理維持についての話を聞くことができた。資料だけでは得る

ことのできない、様々な知見を得ることのできた2日間であった。

1日目はまず不破関跡を訪れた。ここでは資料館で歴史を学びつつ、実際に歩いて、土地の高低差を実感することができた。実際歩いて下から見上げた際の高低差を見ることができるというのは、現地に行ったからこそ確認できる知見であると感じた。次に訪れた古墳は昼飯大塚古墳であるが、地域の古墳公園としてはかなりの大きさを有している。ここでは葺石と埴輪についての話が印象に残っている。葺石の敷き詰めを業者に依頼するだけでなく、地域の学生たちと共に長い時間をかけて敷き詰めたというお話を聞いた。また、埴輪に関しても、業者だけでなく、地元の中学生在が作ったものも並べていることを知った。古墳をただ元の形に戻すだけでなく、地域の人々と古墳との関わりを深くしつつ整備を行なっていることを知り、古墳の管理維持、活用について知見を広めることができた。

2日目には琴塚古墳、坊の塚古墳、東之宮古墳、青塚古墳と多くの古墳を訪れた。琴塚古墳では一周することで古墳の大きさを確認することができ、周濠の存在を実感することができた。坊の塚古墳では、保存活用計画や随所の埋め戻しについて、決れた地点の修復、新たな階段の設置など、方向性についてのお話を詳しく聞くことができた。山頂に位置する東之宮古墳では、かなりの範囲を見渡すことができることを自分の目で確認できた。前方部は関ヶ原方向に向けてつくられており、低地からは古墳全体を見ることができ、当時の人々に古墳の規模がわかりやすいように造られたと考えられていると学んだ。最後に青塚古墳を訪れたが、草刈りは業者まかせではなく、地域住民の方々と行なっているという話を聞くことができた。草刈りによって普段は登れない古墳に登り古墳と関わる機会が作られている。このようなイベントからこの古墳を次の世代につなげることが大切だと感じた。どの古墳も登った際の眺めは広い範囲を見渡すことができ、古墳の位



昼飯大塚古墳の埴輪



青塚古墳

置について多くの学びを得た。また、古墳を見る際は古墳だけに注目するのではなく、周りの山や川を見つづけていくということを実際に見学して学ぶことができた。

古墳を実際に自分の足で歩き、登り、自分の目で古墳からの眺めや大きさを見ることで、資料だけでは得られない貴重な体験、学びを得ることができたと思う。この2日間、活用、管理維持に関して現地に行くことで聞くことのできる話が多くあり、とても充実した学びを得られた2日間であったと感じた。

昼飯大塚古墳：谷野葵帆

今回のゼミ旅行の初日、私たちは岐阜県大垣市昼飯町にある昼飯大塚古墳を訪れた。昼飯大塚古墳は、4世紀末頃に築かれた前方後円墳で、全長は約150m、後円部の直径は約99m、高さは13mに達する。さらに前方部の高さも9.5mあり、周壕を含めると全体は約180mに及ぶという。この時代としては東海地方最大級の古墳であり、実際に目の前にすると、その大きさと迫力に圧倒された。古代の人々がこれほどまでに大きな墳丘を築くことができた背景には、強大な権力を持つ首長の存在や、高度な技術、そして組織的な労働力があったのだろうと想像すると、当時の社会の姿が少し垣間見えた気がした。

古墳の周囲には埴輪が並んでいたが、その中には地元の小学生たちが製作したものも含まれていた。小学生の頃から自分たちの地域にある文化財と直接関わることができるのは、とても貴重な体験だと思う。その体験を通じて、郷土への誇りや文化財への関心を自然と育んでくれるのではないだろうか。訪問中には、古墳の周りを散歩している近隣の住民の方々の姿も目にした。彼らにとって古墳は特別な史跡であると同時に、日々の生活に溶け込んだ存在であり、散歩コースや憩いの場としても利用されているようだった。観光地としてだけでなく、地域の人々の生活の中で息づいている文化財を目の当たりにして、古墳が今なお地域にとって大切な場であることを実感した。

もう一つ印象に残ったのは、昼飯大塚古墳には解説パネルが少なかったことである。あえてパネルを少なくしているのは、研究が完全に終わっていないためであり、後の世代の研究者が自由に新しい知見を加えていけるように配慮しているのだという。これを聞いて、それまで「解説は多ければ多いほど良い」と思っていた自分の考え方が変わった。確定的な説明を並べることが必ずしも正しいわけではなく、学問は常に更新されていくものだという姿勢が大切なのだと気づかされた。

今回の訪問を通して、私は昼飯大塚古墳が単なる古

代の巨大墳墓ではなく、教育や地域社会、そして学問研究と多方面で関わりを持ち続けていることを学んだ。古墳は権力者の象徴であると同時に、現代においては子どもたちの学びの場であり、地域住民の憩いの場であり、そして研究者にとっては新しい発見を待つフィールドでもある。その多様な側面を実際に体感できたことは、このゼミ旅行で得られた大きな収穫だったと思う。

岐阜市歴史博物館について：西村琉来

考古学ゼミの研修旅行の2日目の最初の目的地として、岐阜県岐阜市にある岐阜市歴史博物館を訪れた。この博物館は、岐阜城が位置する金華山の麓にある岐阜公園内に位置しており、岐阜市民が郷土を愛し、郷土の歴史と文化に親しみ、知識と理解を深めるための生涯学習の場として活用することに加え、資料の保存を図り、豊かな市民文化の発展に寄与することを目的として1985年(昭和60)に開館した。館内は、「特別展示室」と「総合展示室」の2つの展示室と講堂や講義室、図書館も備えている。この博物館のエントランスの左手には、1834年(天保5)に発行された木版刷りの細見美濃国絵図を模した巨大な陶板が設置されている。

今回私たちは、1階の特別展示室で行われていた開館40周年記念特別展「岐阜城と織田信長―発掘調査から考える岐阜城の姿」(2025年10月13日展示終了)を主に観覧した。この展覧会では、1984年(昭和59)から開始された発掘調査成果をもとに、同時代の他の城郭の調査成果と比較しつつ、1567年(永禄10)に織田信長が居城を岐阜城へと移したのちの、信長が作り上げた岐阜城の姿についての展示もされていた。この特別展では、岐阜城の出土品だけでなく、岐阜県の大桑城跡出土品や滋賀県の小谷城跡出土品及び、坂本城跡出土品、京都府の勝竜寺城跡出土品などの岐阜県内外の城跡の出土品も展示されていた。この出土品の展示の中には、離れている地域の城跡の陶器や磁器の中に



昼飯大塚古墳からの眺望

も、同じ地域で作成されたと考えられているものも展示されていた。そのような他の城郭の展示品のほかに、「濃州岐阜絵図」があり、岐阜城及びその城下町と周辺の村々が描かれた地図も展示されていた。その絵図内には、当時の城下町の中の武家屋敷や町人地といった地割も描かれており、当時の人々が岐阜城下町内でどのような場所に住み、どういった生活をしていたのかを知ることができる。

2階の特別展示室では、主に3つのゾーンに分けられた展示がされている。最初は「原始・古墳～古代・中世」のゾーンである。このゾーンのうち原始・古墳のエリアでは、旧石器時代から、縄文時代、弥生時代、古墳時代までの考古資料を中心に展示しており、土器のパズルや実際に銅鐸を触るコーナーといった体験を行うことができる場所もある。古代・中世のエリアでは、発掘資料を用いて美濃国の成立や都との関わりについての展示がされている。次のゾーンは「戦国ワンダーランド」である。このゾーンでは斎藤道三の時代から安土桃山時代までの展示をしている。このゾーンの中にある楽市立体絵巻というエリアでは、当時の町屋が再現されていて中に入ることができ、双六や衣装の着付け体験を行うことができる。最後のゾーンは「近世～近代・現代」で、江戸時代の美濃の様子を展示している。

岐阜市歴史博物館を訪れて、今回の特別展で岐阜城下町のことを詳しく学ぶことができた。今後の研究に岐阜城下町のことに加えてさらに理解を深めたいと思う。

〈参考文献〉

岐阜市歴史博物館 パンフレット

岐阜市歴史博物館ホームページ 博物館概要 | 岐阜市歴史博物館 (閲覧日 2025年9月26日)

昼飯大塚古墳と整備：山口匠

研修初日の午後に岐阜県大垣市にある昼飯大塚古墳を訪れた。昼飯大塚古墳は4世紀末に造られた約150mの墳丘を持つ岐阜県最大の前方後円墳である。三段築成の構造であり、後円部からは竪穴式石室、粘土槨、木棺直葬という3つの埋葬形態が確認されている。出土品には玉類、石製品、高坏の他に家形埴輪などの珍しいものも確認されている。

整備・保存に関しては実際に昼飯大塚古墳の発掘・整備を担当した中井正幸さんにお話を伺った。現地には解説板が少なく、短い文章と自然な英文で書かれている。解説板の数を減らしている理由としては今後も引き続き調査を行うことを期待して新たな成果が生まれた時に追加できるようにしているためである。こうした将来の調査まで視野に入れた整備方針は他にも、

盛土を施さない理由の一つにもなっている。

葺石は地域参加型で整備を行っており、一定間隔で縦一列に積み上げてから間の部分にも石を詰めていくという当時の方法を用いて復元されている。植栽も外来のものは用いずに在来のものにし、雑草の成長を抑制するクラピアを用いるなど景観の悪化の対策や在来のものを用いる工夫が施されている。

埴輪に関しては地元中学生に製作してもらうなど教育の一面を踏まえつつ行われており、文化庁や教育委員会とだけの繋がりではなく地域との繋がり、協力関係も大切にされた整備となっている。また、よくある復元として埴輪列が同じような大きさの埴輪を並べ再現されるのに対し、昼飯大塚古墳の整備では埴輪のサイズはあえてバラバラとなっている。ここには「果たして元の姿は全く同じサイズのものを用いられていたのか」という一般的な埴輪列のイメージに対する懐疑的な視点が用いられており、元来の整備に対して一石を投じるような整備方法が用いられている。埴輪列の配置に関しては下部のものは間隔をあげ上部のものは間隔を狭めるように配置されており、中井さんはこの配置は外との境を表していると考えている。

景観としては古墳を見てもらいたい角度が存在し、ここでは前方部からの視点と後円部からの視点を設定されている。そしてその位置に古墳に上る階段が設置されており、古墳を訪れる経路の中で、整備者側が見てほしい視点を通るような誘導の役割も担っている。

現地での解説や整備の話を知りながら昼飯大塚古墳の整備では後に調査が行われることを想定していることが強く伝わってきた。その方法に関しても地域の方と協力して行われるなど更なる地元への愛着や地域への還元につながっていると感じた。また、一般的な整備方法にとらわれず、それが本当に正しいのかという批判的な姿勢を忘れない態度は今後の整備方法を考える上でも重要なのではないかと感じた。

〈参考文献〉



昼飯大塚古墳後円部

中井正幸『日本の遺跡 21 昼飯大塚古墳』2007 同成社古墳紹介パンフレット(閲覧日 2025 年 9 月 25 日)
https://www.city.ogaki.lg.jp/cmsfiles/contents/000000/695/hirui_11_26.pdf

史跡昼飯大塚古墳を訪れて：木村未生

私は今回、岐阜県大垣市に所在する「昼飯大塚古墳」を訪れた。昼飯大塚古墳は、4 世紀前半、古墳時代中期の初頭につくられた前方後円墳であり、美濃地方において最大級の規模を誇る古墳である。全長は約 150m を超え、地域の首長層の権力と当時の社会構造を如実に物語る存在であると同時に、今日では市民に親しまれる史跡公園として整備されていた。実際に現地足に足を運んでみて、資料や文字情報から得る印象とは大きく異なる迫力と臨場感を体感することができた。

まず、墳丘を目前にした時に感じたのは古墳の大きさである。写真や平面図で見ているときには規模感はある程度理解していたつもりであったが、実際に自分の体で歩いてみるとその実感はまったく違った。前方部と後円部が 2 段に築かれ、その周囲をめぐる深い周濠は被葬者の権威を強調するかのよう荘厳さを保っていた。古墳の上に立つと周辺の風景を見渡すことができ、4 世紀当時、この地の首長がいかにか地域を支配していたかを想像すると、歴史のスケールを肌で感じるような思いがした。

昼飯大塚古墳の大きな特徴の一つは、後円部に 3 種類の異なる埋葬施設が確認されている点である。木棺直葬・竪穴式石室・粘土槨という複数の形式が並存していることは、葬送儀礼の移り変わりや地域的特色を示す貴重な証拠であり、考古学的にも高い価値がある。現地の説明板や資料を通じてこれらを学びながら古墳の姿を眺めると、単なる大きな古い墓ではなく、当時の人びとの信仰や権力表象の場であったことを改めて理解することができた。

さらに、後円部の墳頂からは埴輪列や滑石製勾玉な

どが出土しており、墳丘上で葬送儀礼や祭祀が繰り返されていたことも分かっている。私は復元された埴輪を見ながら、古代の人々がここで祖先を祀り、共同体の結束を確かめていた光景を想像した。実際にそこに立つと、千数百年前に営まれた儀礼の雰囲気を追体験できるような不思議な感覚を覚えた。

また、保存整備工事の成果にも深く感心した。2009 年(平成 21)から 4 ヶ年で保存と復元が進められており、現代の私たちが安全に古墳の姿を学び、体感できるよう配慮されている。一部は復元ゾーンとして公開され、墳丘に登ったり周濠の周りを歩いたりすることができた。発掘成果をもとに新たに盛土で修復された墳丘は、学術的な裏付けがあるからこそ説得力があり、まさに生きている文化財と感じられた。保存と公開の両立は難しい課題であるが、市民協働で管理し続けている点に、地域と文化財の理想的な関わり方を見た。現地では、地元の方々が散歩する姿もあった。かつて権力者の墓であった古墳が、現在は地域に開かれ、市民の憩いの場としても活用されている光景は非常に印象的であった。文化財は学術的価値のみならず、現代の社会において新たな役割を担うことができるのだということを強く実感した。

今回の訪問を通じて、昼飯大塚古墳は単なる遺跡ではなく過去と現在を結びつける場であることを学んだ。築造当時の人びとの思いや、保存に尽力する現代人の努力、そして訪れる私たちの学びや憩いの時間がこの古墳を中心に重なり合っている。文化財に触れることは過去を知るだけでなく、今の自分や地域社会を見つめ直すきっかけにもなるのだと実感した。

今回の研修旅行を通して：安國有真

私は今回の研修旅行で、岐阜県関ヶ原町から愛知県犬山市にかけての史跡及び地域の首長墓に相当する前方後円墳を國下先生の旧友である中井正幸氏と共に巡った。この旅行の中で特に印象に残った史跡である昼



昼飯大塚古墳を登る一行



昼飯大塚古墳墳頂

飯大塚古墳についてまとめていく。大垣市に所在する昼飯大塚古墳は墳丘長が約 150mになる前方後円墳であり、主に出土遺物等の関係から 4 世紀末に築造されたと考えられている。

この古墳における史跡整備のこだわりについて長年、当該古墳の整備事業に携わってきた中井氏からお話を伺った。氏は古墳の葺石の一部を地元の小学生が実際に葺く体験を行った点や墳丘の 1 段目と 2 段目に復元されている埴輪を比較した上で、前者は地元の小学生や地域住民の方々と共同で埴輪を作っている点に対し後者は陶芸など焼き物を専門とする職人が作っている点から、技術者だけで埴輪の復元に取り組むのではなく地域の方々を参画させ、自身の地域の歴史に関心を持ってもらう整備が重要であることを教えていただいた。また史跡の解説を行う看板はイラストを設け、できるだけ簡潔な説明にすることや専門用語をより簡単に翻訳すること、東屋の有無などその時代に合わせた史跡の整備を考えていく必要性があることも教えていただいた。他にも地域の方から古墳はなぜ崩れないのかと質問をいただいた際に、分かりやすく答えられなかったことからなるべく専門用語を扱わない簡潔な説明を心がけていくことの重要性も学んだ。

以上のように、史跡昼飯大塚古墳整備の現場に長年従事されていた中井氏だからこそ語ることができる非常に貴重なお話を聞くことができた。そして史跡整備は土木や民間業者との連携をしっかりと取るなど人と資材の管理を正確に行い、秩序を守ることが行政の携わる史跡整備には必要不可欠であり、そのうえで古墳の整備を通して土木や学校など様々な機関との繋がりを広げていき、その世代だけで整備を終わらせない動的な整備事業を行っていくことが非常に重要であることを今回の研修から学んだ。

私はこれから文化財関係の仕事に就きたいと思っているので、今回中井氏が仰ったことを常に考えながら学習を行っていきたい。そして今回、主に前方後円墳



東之宮古墳墳頂

を中心に巡った旅で実感したことは古墳の墳長からの眺望や西濃地域では河岸段丘上に古墳の築造が多いことから川を意識した立地を選んでおり、見せる古墳としての役割を意識していることなどから当時の有力者の古墳に対する考えや思いを少しでも汲むことができたと感じる。今回学んだ古墳の観察視点を踏まえてこれから古墳を見に行くにあたっての視点として新たに取り入れていきたいと思う。

〈参考文献〉

中井正幸 2005 『東海古墳文化の研究』 雄山閣
美濃古墳文化研究会 1990 『美濃の前期古墳』 教育出版文化協会

古墳の整備・活用について：金城利輝

今回のゼミ旅行では、美濃・尾張地域における古墳を多数見学した。その中でも特に、私は古墳の整備に強い関心を抱いた。

訪れた古墳は、岐阜県の昼飯大塚古墳・琴塚古墳・坊の塚古墳、そして愛知県の東之宮古墳・青塚古墳の 5 か所である。最初に訪れた昼飯大塚古墳では、実際にこの古墳の調査・整備に携わった中井先生から、発掘調査の成果や整備に関する苦労話を伺った。昼飯大塚古墳の整備・活用の特徴として、まず保存整備工事が行われ、「昼飯大塚古墳歴史公園」として公開されている点が挙げられる。古墳の現況を保ちながら墳丘を修復する保存整備が進められており、後円部の一部には復元ゾーンが設けられ、葺石・埴輪・周濠などが再現されている。

私が特に興味深いと感じたのは、この復元ゾーンである。昼飯大塚古墳では、埴輪の種類や配置間隔をあえて一定にせず、ばらばらに設置されていた。これは発掘調査時の様子を忠実に再現しようとする試みで、実際に複数種類の埴輪が出土していることや、築成段ごとに埴輪の間隔が異なっていたことを示している。また、埴輪の製作には地元住民が協力し、葺石の復元作業にも地元の小学生が参加したと伺い、地域とともに古墳整備が進められている点が強く印象に残った。さらに中井先生は、この整備は決して完成形ではなく、今後の調査の進展に合わせて更新し続けていくことが重要だと語られており、古墳を「生きた文化財」として未来へ継承していこうとする姿勢に深い感銘を受けた。

このように昼飯大塚古墳の整備は、単に古墳の姿を復元するだけでなく、発掘調査の成果を丁寧に反映させながら、地域の人々と共に作り上げられている点に大きな特色があると感じた。調査に携わった中井先生の努力はもちろんのこと、埴輪や葺石の復元作業に地元住民や小学生が参加することで、古墳は過去の遺跡

であると同時に、現在を生きる人々の学びや交流の場として息づいている。こうした取り組みからは、文化財を守り伝えていこうとする中井先生や地域の人々の強い思いが伝わってきた。

また、今回見学したほかの古墳についても、それぞれに異なる整備や活用の工夫が見られた。琴塚古墳や坊の塚古墳では、地域に根ざした史跡として保存が進められ、比較的小規模ながらも墳丘の姿を身近に感じることができた。東之宮古墳では、墳丘そのものの整備は進められていないものの、パネルや AR などを活用した展示が充実しており、発掘調査の成果を分かりやすく理解することができた。そして青塚古墳では、公園としての整備やガイダンス施設「まほらの館」を活用した展示活動、さらに NPO による管理や地元の祭りなど、市民参加のもとで古墳を守り育てていこうとする取り組みが実践されていた。

これらの古墳の整備や活用の姿を見比べると、単に遺跡を保存するという段階にとどまらず、それぞれの地域性や人々の思いが反映されていることが分かる。学術的な調査成果を踏まえた忠実な復元、地域住民の参加による文化の継承、観光や教育への積極的な活用など、古墳ごとに多様な工夫が重ねられていた。解説してくださった先生方は「大変だった」と口にされながらも、語る姿はどこか楽しげであった。その姿からは、苦勞を超えて古墳の調査や整備に携わることへの喜びが伝わり、聞いている私たちまで温かい気持ちになった。私は今回の見学を通して、古墳の整備には多くの人々の熱い思いが込められており、その思いこそが文化財を未来へとつなぐ原動力になっているのだと強く感じた。

青塚古墳・東之宮古墳を訪れて：音羽香澄

私は研修旅行 2 日目の最後に青塚古墳を訪れた。青塚古墳は犬山市の南部にある前方後円墳で、4 世紀中頃に作られ誰の古墳かは分かっていないが、墳長約 123m と愛知県の中で 2 番目の大きさであることから相当な豪族であったと言われている。古墳を遠目から見るとき、整備がきちんとされていることがよくわかり、管理をしている NPO 法人、服部哲也さんのお話を聞くと毎月 1 回草刈りを地元の人と行っており、例年は 3 月に 1 回行っていたそうだが増やしたそうだ。活動を通して地域の人と繋がりを作り、協力して青塚古墳を守っていくという地元の団結力を知れた。近くに行ったときも草が刈られているから古墳の形が分かりやすく、上に登ると街が一望でき綺麗で、人の手が加えられているからこそ当時の外観を見ることができ、大切な仕事だと思った。また、青塚古墳はまだ調査できていないところもあるがあえて今壊す必要はないと

考えておられた。これは、発掘、研究技術も年々発展していく中で壊す以外の方法で調べられることができるまで待つという考えであり、衝撃的であった。というのも、まだ分からないことは早く発掘調査することにすることは無いと思っていたため、焦らずにこれからも残していく中で今の段階で必要ではないという考え方が無かったからである。しかし研修旅行中にお話を聞いていく中で発掘をするにもお金の問題と調査をするに至るまでの難しさを学び、また発掘行為そのものが古墳を残すうえで最善ではないという違った視点の考えを知ることができてよかった。

今回の研修旅行で様々な古墳を訪れた。東之宮古墳のように自然のまま人の手を加えずに残す形の古墳もある。それらは青塚古墳ほど古墳の形がはっきりと分かるわけではないが、存在感がはっきりとあり、ぐるりと回って見渡す中で長い年月をかけて自然の一部となった古墳の姿を見ることが出来るものである。ただ、周りが住宅地のため異彩を放つ形になっているのは必然であったのかもしれないが、住宅地が周りにないても高い位置に聳え立つ東之宮古墳は特別な印象であった。

東之宮古墳は白山平山の山頂にある全長 72m の前方後方墳で、3 世紀の終わりから 4 世紀の初め頃に作られたこの地域の首長墓である。古墳に至るまでの道のりが大変で急な坂を登らなければならず、いい運動になり、そして坂を登っている最中に街の方を見ると海と街が見渡せて絶景であった。当時の首長墓は位が高くなればなるほど大きさや造営される位置が高い傾向にあるのかと思い、実際に現代まで残っているなかでも特別な古墳だと感じるほどに高貴さを醸し出していた。古墳自体は整備されているが、前述した自然と共にあるという感じで木が沢山茂っていたため山頂からの景色は見えなかった。もし木がなければ街が一望できてとても美しいものであったのだろう。

今回の学習を通して古墳の残し方にも多種多様なも



中井正幸氏の講話を聞く

のがあり、興味深く勉強になり、とても貴重な体験ができた。

ゼミ旅行レポート：岩尾侑真

今回のゼミ旅行で僕は古墳を例にした遺跡の活用方法について新しい視点を獲得することができた。

まず1日目に訪れた昼飯大塚古墳では今回ゼミ旅行に同行して頂いた中井正幸先生が整備に関わっていたので整備中の現実的な工夫を聞くことができた。もともと竹藪に覆われていた土地を取得・発掘する事からはじまり現在の形にまで復元するのにただ元の形に戻すだけではなく見え方の配慮や地元の子供たちの教育にも根差した復元が行われたと聞いて僕が将来復元に関わることがあれば参考にしようと思った。昼飯大塚古墳は四年をかけて復元が行われていてその全てをプロの手だけで行うのではなく市民にも参加してもらいながら復元が行われた。後円部に二段にわたって並べられている埴輪の内、一段目は中学1年生や市民体験で作られた埴輪が並べられていて二段目にプロによって作られた埴輪が並んでいた。プロによって復元された埴輪は鉄分の含まれる量によって赤さが変わるといいう古墳時代の埴輪の特徴を押さえていてさすがだなと感じたし、中学一年生や市民体験で作られた埴輪も並べられていても違和感のないレベルで感心した。後円部の約四分の一にわたって敷かれている葺石の一段目も地元の子供が敷いたと聞き携わった子供が文化遺産の分野に興味を持ってもらうきっかけになり得る素晴らしい活用だなと感じた。

2日目に訪れた青塚古墳でも遺跡をうまく活用している実態を聞くことができた。青塚古墳では見栄えが悪くならないように古墳上の草が伸びすぎないうちに草刈りを行っている。もちろん業者に依頼して草を刈ってもらっているが毎回業者に頼むのではなく地元の人たちを呼んで草刈りイベントとして綺麗にする機会を作っているそうだ。普段はのぼる事ができない青塚



東之宮古墳へ向かう道中の眺望

古墳の上へのぼれるという付加価値のおかげで草刈りに参加してくれる市民の人たちにもいい反応がもらえている。

この2つの古墳を見て、聞いたことから遺跡を復元・活用するときには文化遺産に興味がない人でも参加できる一工夫が考えられていることを身をもって知った。

古墳は研究しようとしている内容と違ってゼミ旅行に行く前は楽しめるのか正直不安だった。しかし中井先生・國下先生をはじめとする現地で解説をしていた方々の現実的な声を聞いたことで自分の研究にも生かせる視点を獲得することができた。特に昼飯大塚古墳で中井先生がおっしゃった「共通点について考えるほうが意外と本質をつくこともある」という言葉は行き詰まっていた僕の卒業論文のテーマ作りに新しい方法を示していただけた。とても実りのある二日間だった。

青塚古墳を訪れて：木和田快

研修旅行の2日目、最後の見学地として愛知県犬山市にある青塚古墳を訪れた。青塚古墳は4世紀中葉に築かれた、愛知県の中でも2番目の大きさを誇る全長約123mの前方後円墳である。この古墳には、当時この地域一帯を支配していた首長が眠っており、同日に訪れた東之宮古墳の首長の次の代の人物であると考えられている。

まず青塚古墳に到着して、少し開けた場所に芝が敷き詰められていることから、とても綺麗で整っているという印象を受けた。これについて、NPO 法人古代瀬波の里・文化遺産ネットワークの服部哲也氏に話を伺った。服部氏は、古墳が作られた当時は葺石で覆われていたが、草が青々と茂る古墳を地元の方々が大切に守ってきたことを尊重し、一面に植物を植えて現在のようになつたと述べられていた。加えて、2025年の4月から毎月地元の方々がボランティアで参加する草刈りイベントが開かれているというお話もして下さった。

この見学では、普段は許可されていない青塚古墳の上に登るといふ貴重な体験をさせて頂いた。すぐ近くを流れる川の河岸段丘上に築かれているため、周囲の家屋より高い位置にある。そのため、墳頂からの景色は想像以上に高く見晴らしが良かった。古墳の後円部の先の北東側には御嶽山が見え、南側には小牧山城を見ることが出来る。小牧長久手の戦いの際に豊臣秀吉がこの古墳に陣を置いた理由がよく分かった。

もう一つ服部氏に興味深いお話をさせて頂いた。それは、青塚古墳では古墳であるにも関わらず石室の調査をしていないということだった。それはなぜかという、原形のままと保ちながら古墳が築かれた当時の様

子を再現するという理念があるからなのだそうです。出来るだけ古墳を掘ることなく中の様子を調べたいという思いでこのような方法をとっていると述べられていた。つまり、本当の石室がどの方向に向いているのかは分からないが、もし頭位が古墳と同じく北東側を向いているのなら、その先にある御嶽山を意識しているのではないかと述べられていた。このお話を聞いて、当時の人々が見ていた景色への想像と今後の新しい発見が期待されることへのロマンを感じる事が出来た。

今回の研修旅行を通じて、岐阜県・愛知県の歴史の地域的な繋がりや関係性を体感することが出来た。フィールドワークを通して自分の目で見て感じることで、地図や写真では分からなかったことが見えてくることを実感できた。その中でも、青塚古墳では地理的關係性や歴史の連続性、地域住民の青塚古墳に対する思いなどを垣間見ることが出来た。この研修旅行で感じて取り入れたものを糧にして、今後の自分の研究を進めていきたい。

〈参考文献〉

史跡 青塚古墳 | 犬山市

岐阜県と愛知県の古墳の保存活用施策 —多様性と課題をめぐって—

宮本凱成

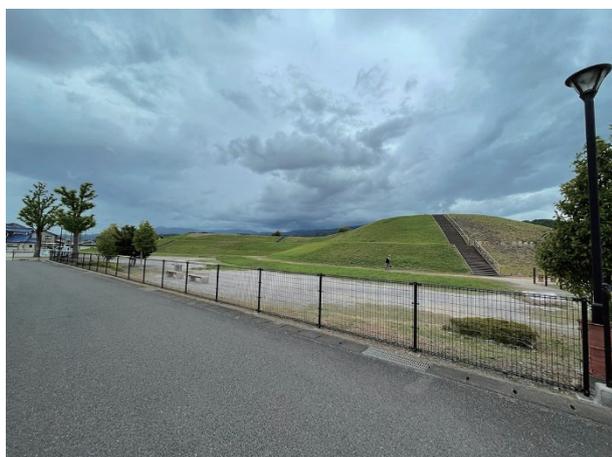
今回のゼミ旅行で訪れた青塚古墳、昼飯大塚古墳、東之宮古墳、琴塚古墳、そして坊の塚古墳は、それぞれ異なる保存活用の姿を示していた。それぞれの保存活用施策を比較することで、古墳という文化財を未来に継承するための多様なアプローチと課題が明確になると考える。まず青塚古墳では部分的な発掘調査にとどめ、墳丘全体を保存しながら史跡公園として整備する取り組みがなされていた。地域住民がボランティアとして維持管理に参加し、併設施設で教育活動を行う姿勢は、文化財を地域資源として共有する積極的な保存の実践例であった。つぎに昼飯大塚古墳も同規模の

前方後円墳であるが、発掘調査を経て整備され、小学生に葺石を積ませ、住民に埴輪製作を担わせるといった体験学習を伴っていた。遺跡を地域住民とともに再構成するという活動を通じ、保存と教育を融合させる形が見て取れた。青塚古墳と昼飯大塚古墳は共に、積極的な保存活用施策の代表例であると考えられる。

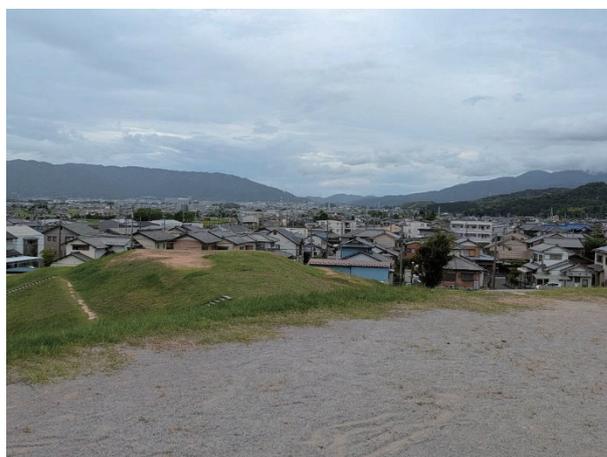
一方で、東之宮古墳と琴塚古墳は現状維持を重んじる保存形態を取っていた。東之宮古墳は山上に立地し、土地所有者である宮司が大規模発掘や史跡公園化を望まない事情もあって、最小限の解説パネルによる案内にとどまっていた。琴塚古墳は森林の中に堂々とした墳丘が残り、その迫力は十分に感じられたが、それを古墳と確認づけるのはやはり展示パネルに依拠せざるを得なかった。公園化された古墳に比べると啓発機会は限定的であり、研究や教育の裾野を広げるには不利であることは否めない。

しかし同時に、こうした制約には利点もある。東之宮や琴塚の現状維持型の古墳は、派手な整備を避けることで遺跡が本来持つ静謐さや環境との一体感を保っており、公園化された古墳では得られない「場の雰囲気」を体感できる。情報発信の広がりという点で限界はあるものの、古墳そのものの存在感や周囲の自然環境を含めて味わえる点は、この形態ならではの価値といえるだろう。

これらに対して、坊の塚古墳は宮内庁によって陵墓参考地とされ、墳丘上への立ち入りや調査が一切認められていなかった。天皇家に関わる可能性を理由に尊厳保持が優先されているが、学術的知見が完全に遮断されることは文化財を国民共有の資源とする視点を欠いている。被葬者の尊重と科学的調査は本来両立可能であるはずであり、封鎖的な姿勢は長期的には古墳時代研究に大きな空白を生む危険を孕んでいる。東之宮や琴塚のように静けさを守りながらも知識を共有する工夫が模索されるべきであり、坊の塚のような完全封鎖型保存は将来的に再考されるべきだと考える。総じ



昼飯大塚古墳歴史公園



昼飯大塚古墳から関ヶ原方面を望む

てみれば、青塚・昼飯大塚の積極型、東之宮・琴塚の現状維持型、坊の塚の封鎖型という三類型が確認できた。それぞれに合理性と課題があるが、保存の目的は単に墳丘を残すことではなく、社会全体で知識を共有し未来へ継承することにある。今回の見学を通じ、積極型と現状維持型の利点を組み合わせつつ、封鎖型に偏らない柔軟な保存の在り方が求められていると強く感じた。さらに言えば、どの古墳も地域社会・研究者・行政が三者で関わり合う枠組みを築くことで、保存の静けさと啓発の広がりを両立できる余地があるだろう。古墳は過去の遺構であると同時に現在の社会資源でもある以上、その保存活用は固定的ではなく、社会状況や技術の進展に応じて見直され続けるべきだ。今回の研修旅行およびそれに基づく比較は、その多様性を理解しつつ、次の保存施策を考える出発点になると位置づけられる。

ゼミ旅行レポート：平野葵依

2025年9月4日から5日にかけて、岐阜県美濃地域でゼミ旅行が行われた。県を代表する古墳の数々やいくつかの資料館を訪れ、美濃地域の古代の人々の営みと地形との関係や、遺跡の保存活用例などについて学んだ。

4日、JR関ヶ原駅に降り立った私たちはまず不破関資料館に向かった。関ヶ原という地名の由来にもなっている不破関は壬申の乱の後、新たな戦への対策として7世紀末までに設置された。資料館周辺には川や切り立った急斜面など、関所の防御力を高めるために利用された地形が今も残っていた。次に私たちは西高木陣屋跡を訪れた。幕藩領主の構えた陣屋には、石垣や建造物、古文書などが良好な状態で残されており、中でも石垣の規模の大きさには目を見張った。その後訪れた昼飯大塚古墳は関ヶ原から東、住宅街の広がる平野に位置していた。旅行に同行してくださっていた中井先生は昼飯大塚古墳の調査保存に関わられており、

お話を聞くことができた。植生や葺き石など古墳に向き合ったこだわりはもちろん、整備の際に接する地域住民や土木業者との関わり方まで、研究者として史蹟整備にあたる者の心構えを知った。美濃国分寺跡に併設された大垣市歴史民俗資料館では、遺構の調査過程や復元にあたっての考え方など、資料豊富な展示がされていた。

2日目は岐阜城の麓、岐阜市歴史博物館から向かった。岐阜城についての特別展が開催されており、地域の歴史の解像度をより高めることができた。その後は琴塚古墳、坊の塚古墳、東之宮古墳、青塚古墳を巡り、それぞれの古墳の周辺地形から見える特徴や整備方法を比較し考えを深めた。昼飯大塚古墳に続き、琴塚古墳、坊の塚古墳は墳頂100mを越える古墳として岐阜県下でも有数である。現在ではその痕跡を見ることしかできないが、琴塚古墳が作られた当初は側を川が流れており、当時の古墳造築に際する地形選びについて考えさせられる。東之宮古墳は白山平山の山頂に、坊の塚古墳や青塚古墳も周囲より一段高い場所にあり、墳頂に登ると周りの地形や近辺の古墳との位置関係がよく見渡せた。古代、人の往来があった主要な道や河川の近く、中でもより高い場所に古墳を作ることで、多くの人により大きな古墳を見せる意図があったのだろうか。青塚古墳では史蹟整備においては珍しく、NPO法人が活用・管理に携わっており、整備活用方法の可能性を感じた。

現地を自分の足で歩いてはじめて知り得ること、浮かぶ疑問、現代にとらわれない視線があることを知った。



西高木陣屋跡



青塚古墳前で記念写真

IV 美濃・尾張の文化遺産をめぐる

2025. 9. 9～9. 10

2025 年度美術史ゼミ研修旅行を振り返って

担当教員：神田 雅章

2025 年度の美術史ゼミ夏期研修は、9 月 9 日・10 日の 2 日間の日程で、名古屋・岐阜方面の文化遺産を見学した。主な行程は以下の通りである。

9 月 9 日 (火)

①熱田神宮宝物館・草薙館／②徳川美術館 (常設展)／③文化のみち双葉館 (旧川上貞奴邸)／④檀木館 (旧井元為三郎邸)／⑤長良川鶴飼

9 月 10 日 (水)

⑥岐阜大仏 (正法寺)／⑦関円空館・関鍛冶伝承館／⑧犬山城・城とまちミュージアム (犬山市文化史料館)・どんでん館

行き先は例年どおりゼミ生から希望を募り、多数決によって決定した。今回訪れた愛知県北西部から岐阜県南西部にかけての地域は、木曾川・揖斐川・長良川が伊勢湾へと注ぐ肥沃な平野が広がり、濃尾平野と呼ばれている。織田信長、豊臣秀吉、徳川家康といった戦国武将を輩出し、江戸時代には尾張徳川家が名古屋城を拠点にこの地を治めた。近代以降は名古屋を中心に発展し、現在では東京・大阪に次ぐ大都市圏を形成している。京都からは新幹線を利用すればわずか 30 分余りで到着する距離にありながら、近畿とは異なる独自の文化圏を築いている。

今回の研修では、当地に伝わる文化遺産の中から、建築・民俗・史跡など、美術に限らず特色ある著名なものを選び、見学コースを組んだ。中世から近代にかけての文化財が中心で、古代の遺産に触れる機会は少なかったが、それもまた当地の歴史的特質を反映しているといえよう。必ずしも意図したわけではないが、行程上、草薙館・徳川美術館・関鍛冶伝承館といった刀剣展示の充実した施設を 3 箇所も巡ることとなり、刀剣ファンには満足度の高い内容となったのではないだろうか。

仏教美術では、岐阜大仏や円空仏など、普段はあまり注目されることのない近世の彫刻作品を中心に鑑賞することができ、貴重な体験となった。ちょうど京都でも円空展が開催中であり、この機会にあわせてぜひ足を運んでほしいと思う。

熱田神宮では、学芸員の方のご案内により展示施設を見学した。学芸員としての経験談を交えた説明は、他では聞けない貴重な内容であり、たいへん有意義であった。また関円空館でも職員の方から解説を伺うこと

ができ、円空を郷土の誇りとして伝えようとする思いが伝わってくる、すばらしい内容であった。

長良川の鶴飼は、過去の研修で訪れたことのある木許先生のご推薦もあり、今回の行程に組み込んだ。丁寧でわかりやすい解説があり、単なる観光的な見世物ではなく、伝統技術の高さとその継承の難しさを、皆が実感することができたと思う。京都の宇治川の鶴飼も、ぜひ見学してみたいものである。

その他、見学先の詳細はゼミ生のレポートに譲る。今回は欠席者もなく、15 名全員が参加し、事故もなかったいへん充実した研修となったことを付記しておく。

熱田神宮を訪れて：信田拓翔

私は今回、名古屋にある熱田神宮を訪れた。これまで教科書や資料で名前を知っていたが、実際に訪れたのは初めてである。熱田神宮は日本神話に関わる草薙神剣を祀る神社であり、全国的にも格式が高いことで知られている。事前に調べたときから大きな神社だという印象はあったが、実際に訪れてみると想像以上に広大で、神聖な雰囲気によって圧倒された。今回の体験を通して、神社の持つ歴史的意義や、現代における役割についても考えることができた。

まず、境内に入ったときに強く印象に残ったのは、都会の真ん中にあるとは思えないほどの自然の豊かさである。名古屋駅周辺のにぎやかな雰囲気とは打って変わり、参道を歩くと大きな木々に囲まれ、空気がひんやりとして感じられた。特に目を引いたのは樹齢千年を超える楠の大木である。幹の内部をよく見ると、戦争で焼けた跡があり、それを新しい幹が覆っていて、歴史や自然の力強さを改めて感じた。本宮の前に立つと、参拝に訪れる人の多さに驚いた。平日であったにもかかわらず、老若男女さまざまな人が集まり、真剣に手を合わせている姿があった。観光で来ている人も多かったが、地元の人が日常的にお参りしているのだろうと思わせる雰囲気もあり、熱田神宮が生活に根ざした存在であることを実感した。私自身も参拝をし、静かな空気の中で手を合わせると、不思議と心が落ち着き、気持ちが整理されるように感じられた。

熱田神宮は、歴史との関わりも深い場所である。特に印象に残ったのは、織田信長が桶狭間の戦いの前に戦勝を祈願し、その後に「信長塀」を寄進したという話である。実際にその塀を見たとき、歴史の中の人物が本当にここに来て祈ったのだと想像し、教科書で習

った歴史が一気に現実味を帯びて感じられた。また、源頼朝をはじめとした多くの武将も参拝したとされ、武士たちにとっても重要な信仰の場であったことがわかる。こうした歴史的背景を持つ神社を自分の目で見ることで、日本の歴史が単なる知識としてではなく、実際の空間とつながったものとして理解できたように思う。

さらに、私は宝物館、草薙館にも立ち寄った。そこには刀剣や工芸品など、国宝や重要文化財が数多く収められていた。特に印象に残ったのは、平安から鎌倉にかけて奉納された刀剣の展示である。草薙神剣と同じ「剣」というモチーフがこれほど多く奉納されていることは、武士や人々にとって剣が信仰の象徴であったことを物語っているように感じた。美術的な価値はもちろんだが、それ以上に祈りの対象としての意味を持つことが、単なる美術館で見る展示とは異なる点だと気づいた。境内を歩いていて思ったのは、熱田神宮がただの観光地ではなく、人々の生活の中で今も生き続けている場所だということである。また、地元の人が親しみを込めて「熱田さん」と呼ぶことも興味深い。格式ある神社でありながら、地元社会の中に自然に溶け込んでいる点に、日本の神社文化の特徴を見た気がした。

今回の訪問を通して、私は神社について新しい視点を得ることができた。今までの私は、神社を歴史的に有名な観光地として見ていた部分が大きかった。しかし実際に熱田神宮を訪れると、そこには古代から続く信仰の重みと、現代の人々の生活に寄り添う柔らかさの両方があることを実感した。歴史と現在が同時に存在している不思議な空間こそが、神社の魅力なのだと思う。今回の体験を通して、私は神社が日本の文化や人々の精神に深く根付いた存在であることを改めて学んだ。

熱田神宮を訪れて：庄司彩乃

愛知県名古屋市にある熱田神宮は、年間約700万人の参拝者が訪れる神宮である。まずは、熱田神宮について述べる。熱田神宮の創祀は、113年、三種の神器の一つである草薙神剣の鎮座に由来している。景行天皇の御代に、日本武尊は神剣を今の名古屋市火上山に残したまま亡くなり、妃の宮簀媛命がその神剣を熱田の地に祀った。この出来事が熱田神宮の始まりであるとされ、以来、伊勢神宮に次ぐ格別に尊いお社として篤い崇敬を集めている。この神宮の祭神は熱田大神であり、草薙神剣を御霊代とする天照大神のことである。天照大神と共に祀られている相殿神は天照大神・素戔嗚尊・日本武尊・宮簀媛命・建稲種命の五神で、五神さまと呼ばれている。また、約6万坪の境内には弘法大師自らが植えたといわれている、樹齢1000年を超える大楠が植えられているほか、本宮、別宮、12の摂社、31の末社が祀られている。年間70もの祭典・神事が行われているが、その中でも最も大きいとされるお祭りは6月5日の例祭「熱田まつり」である。このお祭りでは、天皇陛下の御遣いとして勅使がご参向になる。さらに、本宮を囲むようにある土塀は、1560年に織田信長が奉納したものであり、「信長塀」と呼ばれている。桶狭間の戦いで必勝を祈願したのち勝利を収めたことによる御礼であり、現在も一部現存しているため実物を見ることができる。

次に、実際に訪れた感想を述べる。やはり、「心のふるさと」として全国の人々から親しまれているように、滞在しているだけで休息や安らぎを得られる空間であったと感じる。参拝した日は天気が良く、日傘がなければすぐにのぼせてしまうような暑さであったが、高く生い茂る木々に囲まれた熱田神宮ではどこか涼しさを感じる心地であった。また、上で取り上げた大楠と信長塀を目にすることができた。大楠は樹齢1000年を超えているだけあり、どっしりと地に構えていたが目立っているわけではなく、控えめな存在感でありなが



学芸員さんの説明を聞く様子



熱田神宮の境内

ら、包容力に満ちた暖かな雰囲気を感じていた。信長塀は、遠くから見ると想像していたよりも低く、しかし近づくると自身(158cm)の倍はあると思われるほどの高さをしていた。シンプルだが瓦を幾重にも積み重ね補強し、かつ程よい高さで本宮を囲われていることで、信長公に守られているような安心感を得られるのではと考えた。こうした自然の恵みと歴史の重みが調和する空間だからこそ、人々は日常を忘れて心を委ねることができ、「心のふるさと」として安らぎを見出し親しむのだろう。古くから残る神宮と人とのつながりを一心に感じ学ぶことができる良い時間を過ごせた。

徳川美術館を訪れて：和田守彩夏

私は今回徳川美術館を訪れ、入り口から一番近い展示室にあった「長篠合戦図屏風」に特に関心を持った。その理由は二つあり、一つ目は展示室内でひときわ目を引く存在であったこと、二つ目はこれまで鑑賞してきた屏風作品とは異なる魅力を感じたことである。

まず、この作品の概要を述べたい。「長篠合戦図屏風」は天正3年(1575)5月21日に設楽原で行われた、織田信長・徳川家康連合軍と武田勝頼軍による長篠の戦いを描いたものである。制作年代は18世紀から19世紀とされ、六曲一隻の紙本着色の屏風である。作品の大きさは縦157.9cm×横366.0cmで、横幅は平均的だが縦幅はやや小ぶりに作られている。

しかし、実際に展示室で鑑賞した際には、その大きさや迫力を強く感じた。入口から入ってすぐ右手に展示され、周囲が掛け軸など比較的小さな作品だったこともあり、存在感は圧倒的であった。また、武田軍の赤い甲冑が背景の緑と対比することで、色彩面においても鮮やかさが際立ち、強い印象を残した。さらに火薬の白煙や色彩のコントラストが鮮明であった。また、甲冑の色の違いによりどの武士がどちらの軍勢に属しているのか作品の説明を読まずとも非常によくわかるように描かれていると感じた。色彩やサイズ感、構図の観点で非常に目を引く作品であると感じた。

また、これまで私は狩野派による花鳥など自然や祭事を描いた屏風を中心に関心を持ち学んできたため、実際の合戦を題材にした作品を間近で鑑賞する経験はほとんどなかった。「長篠合戦図屏風」についても存在自体は知っていたが、細部を時間をかけて見るのは初めてであったため新たな発見を得ることができた。

私が今まで学んできた花鳥が描かれたものや祭事を描いたものは理想の世界を表現した美しいものや筆者の描きたい構図を重視した作品が多かった。しかし長篠合戦図屏風は目を楽ませるものという役割の他にも歴史的事実を描いている作品であることから私は記録という役割も担っていたのではないかと考えた。

なぜなら、この長篠合戦図屏風は誰もが歴史を学ぶ上で学んできた織田・徳川連合軍の戦法である「鉄砲3段撃ち」の様子や武田軍の甲冑の色味などがわかりやすく描かれている点が非常に印象的であり理想や美しさよりもそういった細密な描写を重視したように感じられたためである。

また、共通する点もあると考えられた。それは人物の表情などの描写である。事実を描く作品であるからといって甲冑などの装いだけを重視しているわけではなく、合戦に向かう武士の表情や姿勢などが非常によく描かれていると感じた。合戦に臨む武士がみな勇ましい表情をしているわけではなく細部に注目すると織田・徳川連合軍の新しい戦法に戸惑い情けない表情を浮かべて折り返そうとしている武士なども描かれている。この描写は私自身が学んだ「車争図屏風」でも全員が同じ方向を向くわけではなく全員が違った表情を浮かべる人物描写と繋がるように感じた。

私は徳川美術館の見学を通して新たなジャンルの屏風作品に関心を持つことができた。

徳川美術館を見学して：有賀悠葵

徳川美術館は愛知県名古屋市内に位置しており、1935年に開館した私立の美術館である。また、徳川園や蓬左文庫と隣接している。徳川美術館の最大の特徴は尾張徳川家が代々継承してきた「大名道具」が一括して所蔵されていることであり、当時の武家文化を包括的に物語る一次資料として再定義することが可能となっている。徳川美術館本館は鉄骨鉄筋コンクリート造の建築物であり、国の登録有形文化財に指定されている。敷地内には1900年に建てられた旧尾張徳川家邸宅の遺構である表門、「黒門」が残されている。

所蔵品は武器・刀剣、茶道具、能装束、漆工品など多岐に渡り、織田信長などの歴史上の人物の手に渡った来歴が明確に記録されている。現在所蔵品の内、国宝が9件、重要文化財が59件、重要美術品が46件指



徳川美術館

定されている。

私は見学の際にまず目に入ったのは、黒門横の立て看板である。看板には「徳川園と徳川美術館」についての説明が書かれており、名古屋市が設置していることがわかる。説明は詳しく書かれており、美術館に入る前に理解を深めることが出来た。また、日本語だけでなく英語での説明も看板下部に設置されていた。この英語の看板の右下にはQRコードが記載されており、配慮が行き届いていると感じた。

美術館館内は5つの名品コレクション展示室と3つの本館展示室があったが、我々が訪れたときは本館での展示は無く、見る事が出来なかった。ここからは私が見学した際に印象に残った作品について述べる。

一つ目は「葵紋蒔絵細太刀拵」である。徳川治行が所用していた刀に附属している細太刀拵であり、細太刀拵というのは儀式の際に高位の人物が腰に佩くための飾太刀拵を簡易にした刀装である。飾太刀拵同様に儀礼や贈答に用いられた。装飾技法の特徴として鞘の全面を「沃懸地」という高度な技法で覆っている。これは、まだ固まらない漆の地の上に金粉を密に蒔きつけ、研ぎ出して光沢を出す技法である。その上に施されたのが「高蒔絵」である。高蒔絵は、漆や炭粉で文様の輪郭を盛り上げた後、その上に蒔絵を施すことで、文様が立体的に浮き上がる技法である。私が何故印象に残ったかという点、装飾の美しさに惹かれ、説明を読んだ際に、所用していた人物の名前が私と似ており、「葵」という字も私の名前に入っていることで親近感を抱いたからである。

二つ目は「菟田蒔絵小鼓胴」である。技法は木製漆塗と蒔絵であり、黒漆塗りの胴に菟田文様が蒔絵で描かれている。切株や大根、蕪といった「根を張る」ものは、「音を張る」に通じることから、楽器の文様として好まれたとされている。印象に残った理由として、菟田文様が用いられているのは言葉を掛けているからというのが面白く感じたからである。

今回の見学を通して、実物を肉眼で見るということの大切さを再確認することが出来た。特に刀については、展示の際には刃紋が見えるように光を当てていることを知れたため、これからも積極的に現地に足を運び、実物を見るように心がけようと思う。

徳川美術館を訪れて：長尾真帆

徳川美術館について

徳川美術館は、尾張徳川家の伝来品と大名文化の継承を目的とする財団法人尾張徳川黎明会によって、昭和10年(1935)に開館した美術館である。徳川家康の九男で尾張徳川家初代の義直が、家康から受け継いだ遺品「駿府御分物」を中心に、江戸時代を通じて御三

家筆頭であった尾張徳川家の代々の遺愛の品、大名道具を受け継いでおり、現存最古の物語絵巻である「源氏物語絵巻」や三代将軍徳川家光の長女千代姫が尾張徳川家に嫁ぐ際に詠えられた婚礼道具である「初音の調度」など国宝9件と重要文化財5件を含む1万件以上のコレクションを所蔵している。

徳川美術館を見学して

私が徳川美術館を訪れる前に調べていた初音の調度は展示されていなかったため残念ながら鑑賞することはできなかったが、曜変天目などの多くの茶道具や刀剣類を鑑賞することができた。中でも、特に印象に残った展示物について取り上げる。

天目茶碗の見た目がもともと好きだったので、重要文化財の白天目と、油滴天目(曜変天目)が印象に残っている。天目茶碗には、黒地に銀色の斑点や紫がかかった青色の模様があるイメージを持っていたが、白色の天目茶碗もあるということや、天目という名称の由来は、中国浙江省の天目山の仏寺で使用されていた茶碗を、鎌倉時代に日本の禅僧が持ち帰ってきたからという説や、喫茶法をも多く天目山の霊場から得てきたため、この地の寺院の使用していた茶碗を天目と呼んだ説、ただ天目山で焼成したので天目と呼ぶ説など諸説あるということが印象に残った。また、見込にたまった緑色と口縁部の金色、側面の白色の調和が美しく、印象に残った。油滴天目は、黒色の器にびっしりと銀色の斑点があり、黒色と銀色のコントラストが美しく、目を奪われた。

また、菟田蒔絵小鼓胴附葵紋扇散蒔絵鼓箱も印象に残っている。小鼓の模様は、見ただけでは何が描かれているのかわからなかったが、「根を張る」ことが「音を張る」に通じるため、切株や大根が楽器の文様に好まれ、稲の切株が表されているという説明があり、言葉遊びから根を張る植物の文様がよく用いられたというのが、ユーモアがあって面白いと感じた。この小鼓は、慶長16年(1611)3月28日、徳川家康と豊臣秀頼



徳川美術館の黒門

の二条城会見の際に、秀頼から義直に与えられた品であるということを知り、歴史の重要な場面で、贈られた小鼓が今も大切にされて残っているということが印象に残った。

「徳川美術館」：糸雄大

今回、愛知県・岐阜県に訪れた。その中でも愛知県徳川美術館について紹介する。徳川美術館は名古屋に所在し、徳川家康の九男である徳川義直が、父家康から譲り受けた遺品「駿府御分物」を江戸時代を通じて、御三家筆頭の地位にあった大名家、尾張徳川家の歴史とともに受け継いでいる。所蔵されている美術品としては、現存最古の物語絵巻として世界に知られる「源氏物語絵巻」や漆工芸の最高傑作「初音の調度」などの国宝9件をはじめ、1万件を超えるコレクションを所蔵している。

この美術館に入ると一見洋風の建物であるが展示室の入り口は城壁のデザインがなされており、徳川由来の展示物を鑑賞するための感情にさせてくれる。展示室に入るとまず目に入るのが、「銀溜白糸威具足」である。これは尾張家初代義直が着用した具足であり、義直は正月に行われる具足祝いの儀式のために毎年のように具足を新調していた。中でも本品を好み、参勤交代の際には必ず携帯していたといわれる作品である。またこの作品を取り囲むように、「葵紋蒔絵細太刀拵」や「石首魚石入蠟色塗刀拵・脇指拵」といった刀が展示されていた。奥に進むとまた散った雰囲気作品が展示されており、実寸大サイズの茶室が再現されていた。その中には「千利休竹茶杓 銘泪」が展示されていた。これは千利休の茶杓としてもっとも名高い品で、17世紀半ばでの徳川将軍家と諸大名家の名物を集成した『玩貨名物紀』にも記載のある由緒正しい茶杓である。また、狂言の舞台も再現されていた。その中には能装束が展示されており、当時の能の舞台がどのようなものであったかをイメージすることができる展示品であると感じた。そして展示室も終盤となってくると、「広沢切貼込屏風」が展示されていた。この作品は重要文化財に指定されており、伏見天皇が日常の御製を自ら撰録した歌集草稿残巻のうち、春・夏・秋・冬・恋・雑の和歌120首が金銀泥緑青絵の地に貼り込まれており、各部から抽出して編集されたと考えられている。そして展示室の出口付近に「掃墨物語絵巻」が展示されている。白粉と眉墨を取り違えて化粧した娘の顔に、訪れた僧が驚き逃げ出してしまう。これを悲しんだ娘が仏心を起こして剃髪出家し、母尼とともに北山小野の庵で仏道に励むという物語を描いた作品であり、重要文化財に指定されている。

このように徳川美術館は尾張徳川家に関する美術

品が多数展示されており、尾張徳川家の歴史を学ぶには最適な場であると感じた。美術品のほかにも徳川美術館を取り囲む自然や庭園やカフェがあり、日々の疲れを癒す場や自然を堪能する場がある。このように徳川美術館は展示品の鑑賞だけでなく、展示室を出ても楽しめる美術館である。

文化のみち 榑木館を訪れて：岡本一晃

私は先日、名古屋市東区にある「文化のみち榑木館」を訪れた。榑木館は大正末期に建てられた和洋折衷の邸宅であり、かつては名古屋の実業家・井元為三郎の邸宅として利用されていた建物である。現在は文化財として保存され、一般公開されている。実際に館内を巡ってみると、名古屋の近代都市文化の一端に触れることができ、当時の暮らしや美意識を感じ取る貴重な体験となった。

まず印象に残ったことは和と洋が巧みに融合した建築様式であるということである。玄関や客間は洋館風でステンドグラスが備えられ、西洋の生活様式を取り入れていた。一方で、奥の座敷や庭園は伝統的な和の趣を保ち、畳の間や障子のある空間が広がっていた。この対比から、当時の上流階級が「近代化」と「日本らしさ」の両立を模索していたことが伝わってきた。私はそこに、大正・昭和初期という時代の独特な文化的空気を感じ取った。また、館内は当時の生活の痕跡が残っており、浴槽・トイレ・リビングや寝室等が、家具や当時の雑貨、道具とともに展示されていた。館内にはカフェも併設されており、地域の方々が集い、地域交流や和みの場として利用されていた。これにより、建築が単なる住居ではなく「文化の器」「地域交流」としての役割を果たしていたことが理解できた。

さらに、榑木館が「文化のみち」の一部として位置



文化の道 榑木館

づけられている点も重要だと感じた。文化のみちは、名古屋城から徳川園までの地域を指し、明治から昭和にかけて活躍した実業家や文化人の邸宅が点在する。この地域を歩くことで、名古屋が近代都市として発展していった歴史をたどることができる。榑木館はその象徴的な拠点のひとつであり、地域の歴史を語る存在であると実感した。

今回の訪問を通じて、私は建物を鑑賞するだけでなく、「文化を保存することの意義」を改めて考えることができた。近代建築はしばしば取り壊されやすい運命にあるが、榑木館のように保存・公開されることで、私たちは時代の空気を直接体験できる。過去をただ資料として学ぶのではなく、実際に空間を歩き、光や風を感じることによって初めて理解できるものがあるのだと思った。

文化のみち榑木館は、名古屋の近代史を学ぶ上で貴重な存在であり、また建築の美しさを楽しむことのできる空間でもあった。今後もこのような文化財が守られ、次の世代へと伝えられていくことが重要だと感じた。

文化の道二葉館を訪れて：福本太義

私は先日、名古屋市東区にある「文化のみち二葉館（旧川上貞奴邸）」を訪れた。二葉館は大正期に建てられた和洋折衷の邸宅であり、日本近代演劇の先駆者である川上貞奴が暮らした場所として知られている。現在は文化財として保存され、一般公開されている施設である。実際に館内を巡ってみると、名古屋の近代都市文化の一端に触れることができ、当時の暮らしや文化的雰囲気を実際に感じられる貴重な体験となった。

まず印象に残ったのは、建物全体に漂う和洋折衷の趣である。外観の赤い屋根や大きな窓、館内に施された洋風のステンドグラスや家具などからは、西洋文化を積極的に取り入れていた当時の雰囲気が伝わってきた。一方で、奥の座敷や庭園には伝統的な和の意匠や



文化の道 二葉館

空間が残されており、その対比から明治、大正期の近代化と日本らしさの両立を体現していることがうかがえた。そこには、当時のモダンな文化と伝統文化の融合があった。

また、館内には川上貞奴の活動や近代演劇の歴史に関する展示が充実しており、彼女が女性として、また文化人として果たした役割を学ぶことができた。展示資料からは、社交の場として多くの文化人や政治家が集まり、交流の拠点としていた当時の様子もうかがえ、二葉館が単なる邸宅ではなく文化交流の舞台だったことがわかった。

さらに、二葉館が「文化のみち」の拠点の一つとして位置づけられている点も興味深く感じた。名古屋城から徳川園へと続く地域に点在する武家屋敷や近代建築をめぐることで、都市の近代化と文化の形成過程を一望できる仕組みとなっており、二葉館はその象徴的存在であると実感した。

今回の訪問を通して、私は建物の美しさを鑑賞するだけでなく、文化財を保存し活用することの重要性についても考えさせられた。近代建築は取り壊されやすいものであるが、二葉館のように保存・公開されることで、当時の空気を直接体験することができる。資料を通して学ぶだけではなく、実際に空間を歩き、実物を見ることで初めて感じることで理解できることがあるのだと思った。

文化のみち二葉館は、名古屋の近代史を学ぶ上で貴重な存在であり、また建築の美しさを楽しめる空間でもあった。今後もこのような文化財が守られ、次の世代へと伝えられていくことが重要だと感じた。

長良川の鵜飼：宮崎さくら

私の所属しているゼミでは、愛知県名古屋市及び岐阜県の岐阜市、関市を訪れ、美術史に関わるだけでなく、無形文化遺産などにも触れて多くの学びを得た。その中でも、私は鵜飼について印象に残ったことや考えたことを述べていきたいと思う。

鵜飼とは、鵜を使って川魚を捕る日本古来の漁法であり、全国でも限られた地域でのみ行われている。特に岐阜県の長良川の鵜飼は1300年以上の歴史を持っており、国の重要無形民俗文化財にも指定されている。実際に船に乗って間近で見ることができたことは、大変貴重な経験だったと感じる。

まず、木製の船に乗り、薄暗い川を進む船はとても風情があった。また、鵜飼が始まるまでの間に仕出し弁当を頂き、行き来していた踊り舟の余興を楽しませて頂いた。また、鵜飼の始まりの合図には花火が打ち上がった。このような、観光としての演出も感じられた。とても楽しく、気分も上がり、非日常を味わうこ

とが出来た。伝統と観客に楽しんでもらうための工夫が共存しており、民俗行事の観光化の一つの形を実感することもできた。

鵜飼の始まりを告げる花火が上がって、鵜飼が始まった。「狩り下り」か「付け見せ」「総がらみ」の順番で鵜飼を見学した。狩り下りとは、観覧船が鵜舟1隻と並走して川を下ることである。個人的に1番しっかり鵜飼の様子を見ることができたと思う。付け見せとは、停泊したままの観覧船から鵜舟が川を下る様子を見ることである。最後に、総がらみという、鵜舟が川幅いっぱい横一列になり、一斉に鮎を浅瀬に追い込む鵜飼のクライマックスを見た。このときに、特に印象的だったのは、私たちのすぐ近くで鵜飼の様子を見せてくれた場面である。観覧船を漕いでくださった方が船の先の方へ来ても良いとみんなを集めて下さり、鵜の動きや様子を間近で観察できたことで、ただ遠くから眺めるのとは違った迫力や生き生きとした印象を受けた。また、船を漕いでくれた方が一つひとつ丁寧に説明をしてくださり、その説明がとても分かりやすかった。鵜匠とは漁師であり、漁は鵜から魚を横取りするという方法であるという説明が印象に残っている。鵜船に近づけてくださったため、理解が深まったと思う。さらに、鵜飼の後には、鵜が籠に戻される場所まで見届けることができた。単に「漁を見せる」だけで終わらず、鵜が休む姿まで含めて一連の流れを体験できたことが、とても印象的だった。鵜と人とが共に作り出すこの伝統行事の奥行きを感じられたように思う。

全体を通じて、長良川での鵜飼体験は、ただ珍しいものを「見た」というだけではなく、五感を使ってその雰囲気を感じ、伝統が現代にどう受け継がれているのかを考えるきっかけとなったと感じる。みんなで余興を楽しみながら食べた食事や鵜飼が終わった後の鵜のかわいらしい姿など、メインの鵜飼を見学する以外にも、思い出が出来た。これらの体験を通じて、単

なる重要無形民俗文化財としてではなく、多くの方に楽しみながら伝統を体験し、知ってもらおう工夫がなされた文化として捉えることができた。

岐阜大仏：村山孝成

今回、ゼミ旅行で岐阜を訪れた際、岐阜大仏（正法寺）を見学する機会を得た。奈良の東大寺大仏や鎌倉大仏に比べれば知名度は高くないものの、岐阜大仏はその造形技法や建立の背景に独自の特色を持ち、学術的にも注目すべき存在であると先生から説明を受けていた。実際に大仏殿に入り、目の前に広がる高さ約13メートルの大仏を見上げたとき、まず感じたのはその圧倒的な存在感であった。屋内に収められた大仏は、奈良や鎌倉の大仏とは異なり、閉ざされた空間全体を満たす力強さを備えており、視覚的效果として非常に独特である。

特に注目すべきは、その造立技法である。岐阜大仏は、竹材で骨組みを組み、その上に粘土を塗り固め、さらに和紙を幾層にも貼り重ねて形を整え、最後に漆と金箔で仕上げられている。これは「乾漆仏」に通じる手法であり、日本でも極めて珍しい造形方法である。乾漆仏といえば奈良時代の鑑真和上像などが代表例として挙げられるが、18世紀の地方都市でこの技術が大規模に応用されたことは注目に値する。銅や石といった堅牢な素材ではなく、竹や紙といった日常的な素材を用いた点は、限られた資源の中での創意工夫の産物であり、また地域の信徒や職人たちの総合的な力の結集であったと考えられる。その保存の難しさを思えば、今日まで伝わってきたこと自体が文化財としての大きな価値を示しているといえるだろう。

さらに、建立の歴史的背景も重要である。18世紀半ば、斎藤利運という僧侶が発願し、完成までに38年を要したと伝えられている。当時の社会状況を考えると、度重なる飢饉や災害が人々を苦しめていた時代であり、その中で「災厄を退け、平和と安寧を祈る」目的で大



鵜飼船からの様子



岐阜大仏（正法寺）

仏が造られたことは理解できる。つまり岐阜大仏は、単なる宗教施設としての意味にとどまらず、共同体が危機を克服するために共有した精神的支柱の具現化であったと考えられる。信仰と社会的背景が結びついた造形物として、大仏は歴史的資料価値をも備えているのである。

ゼミ旅行という形で仲間や先生と共に見学できたことで、単なる観光体験にとどまらず、学術的視点からの理解を深めることができた点は大きな収穫であった。例えば、建立の歴史を地域社会の文脈に位置づけたりすることで、大仏が文化財として持つ多面的な価値をより明確に捉えることができた。文化財の意義は「過去の遺物」として保存することにとどまらず、そこから当時の社会や人々の心性を読み取ることにある。岐阜大仏はまさにその好例であり、宗教史・美術史・地域史の交差点として位置づけられるべき存在だと考える。

今回の見学を通じて、私は岐阜大仏を「ただの大きな仏像」としてではなく、歴史的背景と技術的工夫が融合した学術的価値の高い文化財として捉えるようになった。柔和な表情が与える安心感は個人的な体験として心に残る一方で、その背後にある造像技法や社会的意義を考えることは、文化財研究の一環として非常に有意義であった。今後も他の文化財を見学する際には、外見の印象だけでなく、成立過程や歴史的背景を踏まえた総合的な理解を心がけたいと感じた。

関市円空館：安川仁菜

施設概要

江戸時代に活躍した仏師、円空（1632～1695）が造った仏像群を展示する博物館。関市に約290体残されている円空仏のうち、約40体が展示されている。

館内は、円空についての史料を集めた図書コーナーのある管理棟と、展示を行う展示棟から構成されている。

円空について

円空は寛永9年（1632）に美濃国、現在の岐阜県で生まれ、若くして出家した後、近畿地方から北海道まで全国を遊行しつつ仏像を造り歩いた人物である。生涯で造った仏像の数は約12万体と言われ、約5000体が全国に残されている。

円空の造る仏像は繊細とは言えない彫り筋のものが多く、中には木っ端仏と呼ばれる木の切れ端に仏の顔や合掌手だけを彫ったものも存在する。これは少しでも早く仏像を造り、すぐに次の場所へ移動することで多くの仏像を造るためであり、このことから円空のより多くの人々を救いたいという思いが伝わってくる。

また、円空の造る仏像はほほえみを浮かべているものが多く、それらの仏像は「微笑仏」と呼ばれており、微笑仏のほほえみは現代の人々をも惹きつける魅力をもつ。

私は仏像の中でもとりわけ鎌倉時代の写実性に富んだ仏像を好んでいるのだが、決して写実的とはいええない円空仏にも強く心惹かれている。

円空仏を実際に目にするまでは、鎌倉彫刻などと比較し「適当に造ったのではないか」あるいは「江戸時代の仏師だから上手く造れなかったのではないか」と考えていた。しかし、実物を目にするとその存在感に圧倒され、仏教を深く信仰した円空だからこそ造れた円空仏は唯一無二であると感じている。

関市円空館を見学して

円空館では事務員の方が丁寧に案内をしてくださった。円空館や円空についてはもちろん、関市そのものについても教えていただいた。私はこれまでに円空仏に関する書籍などを読んだことはあったが、初めて聞くことも多くとても良い時間を過ごすことができた。

私が最も印象に残った円空仏は両手で薬壺をもつ薬師如来像である。両手で薬壺をもつ薬師如来像も珍しいが、薬壺は平べったい形で壺の持ち手が大きく存在感があり、まるで柿の実のように見え大変かわいらしく感じた。

これまで円空仏を展覧会などで目にすることはあったが、円空が生きた地で円空仏に相對するということは特別な体験であった。関市には洞戸円空記念館というもうひとつの円空に関する博物館があるといい、そちらにもいつか行ってみたいと感じた。

また、今回のゼミ旅行を経て、本来円空が造像し、仏像を納めたであろう寺社の小さな厨子や祠に現在も安置されている円空仏を拝してみたいという思いも強くなった。



関市 円空館

関鍛冶伝承館：中嶋大遥

今回ゼミ旅行で岐阜県関市にある関鍛冶伝承館に訪れた。関鍛冶伝承館を見学し、日本の伝統的な刀剣製作技術とその歴史について深く学ぶことができた。関市は「刃物のまち」として全国的に知られており、鎌倉時代から続く刀鍛冶の技術が現代まで受け継がれている場所である。

関鍛冶伝承館は、関の刀鍛冶の歴史と技術を後世に伝えることを目的として設立された施設である。館内には、鎌倉時代から現代に至るまでの刀剣類が数多く展示されており、その変遷を時代順に追うことができる。特に印象的だったのは、関の刀工である元重、兼定、兼元などの名工による作品群である。これらの刀剣は、単なる武器としてではなく、芸術作品としての価値も非常に高いものであった。展示品の中でも、刀身の美しい刃紋（はもん）や、精緻な彫り物が施された作品には特に目を奪われた。一本一本の刀剣から、職人の魂と技術の高さを感じることができ、何百年もの間受け継がれてきた技術の重みを実感した。

関鍛冶伝承館では、実際の刀鍛冶の実演を月に一度行なっている。我々は見学できなかったが実際の映像を見ることができた。真っ赤に熱せられた鉄を、職人が槌で叩き続ける様子は圧巻で火花が散る中、リズムカルに響く槌の音は、まさに伝統工芸の現場そのものであった。職人の一つ一つの動作には無駄がなく、長年の経験と技術が凝縮されていることがよく分かった。

展示を通じて、関の刀鍛冶が発展した背景についても学ぶことができた。関市周辺は良質な砂鉄と木炭に恵まれ、長良川の清流があることから、刀鍛冶に適した環境が整っていた。また、鎌倉時代から戦国時代にかけて、多くの武士からの需要があったことも発展の要因であった。現代においては、日本刀の需要は大きく変化したが、関の技術は包丁やハサミなどの刃物製造に活かされ、「関の刃物」として全国的なブランドを確立している。伝統技術が現代の産業に適応し、発展している様子を見ることができたのは非常に興味深かった。

見学を通じて最も考えさせられたのは、伝統工芸の継承の難しさである。刀鍛冶の技術習得には長期間を要し、また現代社会においては経済的な面でも課題が多い。しかし、関鍛冶伝承館のような施設の存在により、若い世代にも伝統技術の素晴らしさが伝えられていることは非常に意義深い。実際に、館内では地元の小中学生たちが見学に訪れており、子どもたちが真剣に展示を見つめる姿が印象的であった。このような取り組みを通じて、次世代への技術継承の基盤が築かれていると感じた。

関鍛冶伝承館の見学を通じて、日本の伝統工芸技術

の奥深さと、それを守り続ける人々の努力を深く理解することができた。単に過去の遺物として保存するだけではなく、現代に活かし、未来へと継承していく重要性を実感した。

また、職人の技術と精神性の高さに触れることで、ものづくりに対する姿勢についても考えを新たにしました。効率性や合理性が重視される現代社会において、時間をかけて一つの技術を極める職人の姿勢は、私たちが学ぶべき重要な価値観であると思いました。

犬山城：杉山彩輝

今回の9月9・10日に開催されたゼミ旅行では、愛知県と岐阜県を訪れた。徳川美術館や熱田神宮、円空館を訪れたが、本稿では犬山城について述べる。

まず、犬山城は室町時代の天文6年（1537）頃に織田信長の叔父・信康が築城したといわれており、天守は現存する日本最古のものである。木曾川沿いの高い山の上に建てられた「後堅固（うしろけんご）の城」で、中山道と木曾街道に通じ、木曾川による交易、政治、経済の要衝として、戦国時代を通じて重要な拠点となっていた。木曾川南岸、標高80mの城山に築かれた犬山城は背後を断崖に守られた典型的な後堅固の城である。本丸、杉の丸、樅の丸、桐の丸、松の丸を南方に階段状に連ねて配置してあった。天守の他に現存する建物はなく、石垣や空堀が残されている。

犬山城の天守の屋根には、桃の形の瓦が付けられている。他では見たことがなく珍しいがこれには意味があり、桃は食べると不老不死の力が得られると言われ、長寿の象徴であり、その強い生命力から魔除けの文様としても使われてきたのだという。そのため桃の形をした瓦が付けられている。城の構造としては、まず四階に「高欄の間」がある。これは戦国時代の見張り台、司令塔であったとされる。また、自然の断崖という天然の防備を持っている。他にも「武具の間」というものがある。これは、武士の武器武具庫に使用されていた部屋であり、三方に武具棚が設けてある。

「付櫓」は東南のすみの突出部にあたり、見た目は窓のようなものであり、その隙間から攻撃をするものである。また、遠くまで見通すことができるため、警備にも適していることがわかる。また似たようなものとして、「石落としの間」もある。これは、石垣から登ってくる侵入者に石を落として防ぐものであり、石垣よりも外に突出しているのが特徴である。次に、「上段の間」である。ここは殿様が使用した部屋であり、床が一段高くはられ、この部屋だけ猿頬天井が張っており、この城の最上室となっている。猿頬天井とは、竿縁に猿の頬のように下すぼまりの断面形状を持つ天井で竿縁天井の一種であり、手間がかかるため一般の竿

縁天井より格式が高いとされている。また、この部屋の奥に武者隠しの間があり、殿様を守る武士が待機していた。

これらのように、犬山城は見た目が美しいだけでなく、攻撃や防衛のための造りも施されており工夫がさまざまされているとわかる。また、立地も山の上に建てられており、自然や地形を活かした城となっていると感じた。少し降りると城下町が広がっており、ここが当時も賑わっていたことがうかがえた。

今回のゼミ旅行を通して、自身の目で実物を見ることが重要であると感じた。写真からではわからない細かいところや造りなど、足を運ぶことが様々な発見につながると感じた。

犬山城を訪問して：石田日菜子

今回のゼミ旅行の最後の目的地として愛知県犬山市にある犬山城を訪れた。犬山城は、室町時代の天文6年（1537）に織田信長の叔父である織田信康が築城した。中山道と木曾街道に通じ、木曾川による交易、政治、経済の要衝として戦国時代を通じて重要な拠点となった。3層4階地下2階の望楼型の天守は現存する日本最古のものである。昭和10年（1935）に国宝に指定され、平成16年（2004）までは日本唯一の個人所有の城として知られていた。扇状地である濃尾平野の扇の要に位置し、天守の最上階からは絶景を望むことが出来る。尾張と美濃の国境に位置するため、国盗りの要所となり、その城主はめまぐるしく変わっていった。

犬山城の天守は他の大規模な城郭と比較すると小規模ではあるが、戦国時代の歴史的な重厚感が十分に感じられた。天守閣の中に入ると、1階には上段の間と呼ばれる殿様が使用した部屋があり、更にその奥には殿様を守る武士が待機していた武者かくしと呼ばれる部屋があった。2階に上がると中央には武具棚を備えた武具の間があり、その周りを武者走りが巡っている。また城内には、犬山城の鬼瓦や鯨瓦、歴代の当主が使用したであろう鎧、歴代城主の肖像画・写真など非常に多くの歴史資料が展示されており、当時の様子を容易に想像することができた。加えて、展示されていた縮小模型を通して、実物では見落としがちな細部を詳細に確認することができる点が印象的であった。城内で特に印象に残ったのは、角度の急な階段と天守閣の最上階の回廊の欄干の低さである。現代の私たちからしたらなじみのないものであるが、それこそが、城が使われていた当時の様子をそのまま感じさせてくれる要素であると感じた。また、犬山城天守は建築当時の木材が多く残されており、城内は木のぬくもりを感じるとともに、歩くとミシミシと鳴る音など五感で犬山城を楽しむことができた。

犬山城の城下町には城とまちミュージアムという建物がある。江戸時代の犬山城下町を再現した巨大なジオラマが置かれており、昔の犬山城の姿や当時の人々の暮らしぶりがわかるようになっている。このミュージアムでとくに印象的だったのが小牧・長久手合戦図の展示方法である。絵がデジタル化されていて、自由に拡大したり視点を動かしたりできたほか、普段は見逃しがちな細部までじっくり見ることができたのが新鮮だった。また、犬山に伝えられた数多くの美術工芸品や歴史資料などを通して、犬山城についてより理解が深まったように感じられた。

今回犬山城を訪れたことで非常に多くのことを学ぶことができた。戦乱や災害の中で日本各地の多くの城が失われてきたなかで、今日までその姿を保ち、様々な角度から歴史を感じることでできる犬山城を見学できたことは、非常に価値のある経験になったと感じた。

犬山城を訪れ感じたこと：野間阜生

私たちは2日目に愛知県にある犬山城を訪れた。犬山城は現存12天守のひとつであると同時に、天守が国宝に指定されている城である。また自然の中の山の上に位置しているため、好天時には、天守最上階より御嶽山や岐阜城、木曾川などの絶景を見ることが出来る。また犬山城は城下町と一体となった総構えの城郭であることから、訪れた際には城下町の雰囲気なども楽しむことができた。その城下町には古い町並みが残されていて、昔ながらの横丁やお屋敷などの歴史を体感することができる。犬山城は1537年に、織田信長の叔父にあたる織田信康が、前身である木之下城から城郭を移して築城したと言われている。城だけでなく城下町も堀で囲まれていたため、防御にも優れていると感じた。

犬山城を実際に目の当たりにして内部に入る時に私が感じたことは、正直そこまで高さがなく防御の城であるのかと疑問に感じた。しかしいざ内部に入ると1階から急な階段があり、そのような階段を何段も登っていくうちに、犬山城の内部の雰囲気と外観から感じた高さのギャップに圧倒された。そして、屋根裏階である3階を抜けると、江戸時代からあると言われる「赤いじゅうたん」が敷かれた最上階・4階に到着し、そこにはベランダのような廻縁と、その手すりである高欄が巡っており、廻縁に出ると360度の絶景が楽しむことができた。1階は納戸の間、2階は武具の間、3階は唐破風の間に区画されており、そこには犬山城に伝来すると言われている最も古い瓦である鬼瓦や、軒丸瓦の展示や、四戦場の図、鎧などが展示されていた。また、天守の南東と北西に位置する櫓も覗くことができるようになっており、敵が天守入り口に差

し掛かった際に、側面から攻撃を加えることができること、内部からでも防御の城であるということを認識することができた。このように犬山城では、1階から4階まで登ることができることや、犬山城に関連する様々な歴史資料を犬山城の中で見たことで、犬山城の歴史や雰囲気実際に触れ体験することができ、私にとってとても貴重な経験になった。

城下町の中には、城と町ミュージアムやからくりミュージアムなど、犬山の歴史文化を掘り起こし、魅力的に展示されている施設がある。城と町ミュージアムの館内には、江戸時代に犬山城主を務めた成瀬家由来の工芸品や、犬山ゆかりの歴史資料などが展示されており、犬山城下町を再現したジオラマなどの常設展示もされていて、犬山城を登った体験から一変して次は俯瞰的に見ることができるとてもいい展示だと思った。

2025 年度 文化遺産学専攻夏期研修旅行 報告書

発行 2026 年 2 月 20 日

編集・刊行 龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻

〒 600-2368 京都市下京区七条大宮東入大工町 125-1